

---

# 『リリカルなのはSoldierS』 ~ The crisis of crime ~

風花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『リリカルなのはSoldiers』 The crisis  
of crime

### 【Nコード】

N3069T

### 【作者名】

風花

### 【あらすじ】

少女達は己の悲運に泣かず、仲間の為にだけ、涙を流した

注・この作品は所々とある作品と同じ箇所がありますがそれは全てその作品の作者に許可を頂いておりますのでそのつもりでよろしく願います

黒き英雄は二つ運命を変えた。だが、ここにもう一つ英雄の活躍に

より運命が変動した者が、少女がいた。

少女の名前はスバル・ナカジマ。ロストログアによる臨海第8空港大火災に巻き込まれた彼女は絶望の淵にいた。だが、彼女は助かった。助け出された。その時は名も無き。しかし世界では英雄と語り継がれている青年、レイン・アスハに。

運命のいたずらにより助け出された泣き虫だった彼女は泣く事を止め、レイン・アスハの様に危険を顧みず、誰かを助けたいと心に宣言し、レイン・アスハから受け取った刀で剣術を学んだ。

それから一ヶ月後、彼女は時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校へ入学する。

そこで出逢うパートナー、ティアナ・ランスターを初め、新たな仲間と共に強くなろうと訓練する。だが、彼女達に次々と降り掛かる試験。悲しむ彼女等に差し伸べられた手を握った先に待ち受ける世界。そして運命は彼女達をどうするつもりなのだろうか

これは『リリカルなのはStrikers』(The last of crime)の四年前から語られる少女達の真実。

彼女達が背負う始まりの罪の物語。

《蒼》や魔導戦士……その謎が今、すべて明らかに

## 登場人物紹介 其の壱（前書き）

初めての方は初めまして。知っている方は今日は

プリンセス

自称パクリ王でもある風花です。あ、パクリ女王でも可ですよ？

始めました。ええ、始めました。私の作品《『リリカルなのはS  
trikers』 〈The last of crime〉》一  
周年記念として、オリジナル設定を持つスバルとティアナの過去物  
語 外伝小説です

登場人物紹介なので正式な始まりは次回からですが、まずはご挨拶  
をと思いこうして書かさせて頂いています

さて、この小説を読むに当たって三つほど注意事項があります

### 注意事項その一

私が書いている小説の中でも一際更新が遅いこと

本編や別作品を基本的に中心的に書いていくので早くて一ヶ月。遅  
くて二、三ヶ月のペースで書いていきます

### 注意事項その二

ギャグ要素が第一章

ここでは第一幕ですが、そこぐらいで後  
の話にはほとんどありません

それに加え、実に『リリカルなのは』らしくありません。人を斬つ  
たり血が出る描写を描いたり、はつきり言って魔法少女じゃありま  
せん

正直 書いてて楽しかったです（オイ

### 注意事項その三

原作キャラ及び『リリなのはcrime』主要キャラがまったく出て  
きません

精々、主人公であるレイン・アスハの名前がちらほら出たり、例え

として魔導師の誰かの名前が出るぐらいです

そんな注意事項から導き出される私からの読み方は……

『気まぐれで見る気分で見ましよう』です！（さらにオイ

では　　今宵の私の会話は一先ず、これまで

次回の前書きor後書きでお会いしましょう

## 登場人物紹介 其の壱

スバル・ナカジマ

出身：エルセア

髪の色／眼の色：蒼／緑

年齢：11

性別：女

利き手：右

魔導師ランク：訓練生の為、無し（剣術のみならばA。魔法のみならばE）

デバイス：クラウドディアカルマ

魔力光：水色（デバイスも魔力光を持ち、その色は漆黑）

術式：古代ベルカ式

趣味：美味しいアイス探し

本作の主人公

新暦0071年4月、ミッドチルダ臨海第八空港、ロストロギアによる大火災が起こるといふ大事件に姉妹共々巻き込まれたが（姉、ギンガは救助にあたってたフェイトに助けられていた）、偶然にも元の世界から飛ばされた伝説の英雄になる前の“黒き剣聖”レイン・アスハに助けられる

助けられた後、レインのことを知り、レインのように強くなりたいと憧れを抱き、自分に合った剣術を独学で学ぶ

一ヶ月後、魔法を練習しないスバルを見たギンガが見かね時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校に半ば、無理矢理入校させられる

魔法を使わずに戦うという珍しい戦闘姿勢で入学当初から注目と同時に半数以上の訓練生とほとんどの訓練教師から嫌われる存在となる

バトルスタイル

それでも彼女は気にせず、レインの言葉を信じ、剣術を鍛えていく流派はレインがたまたま残した文献（正確には漫画）から覚えた我流剣術『蒼天御昂流』<sup>そうつてんみすはりゅう</sup>（後に命名）

使用デバイスはレインが自分に与えてくれた刀を見知らぬおじさん（正体はスカリエッティ）がデバイスに改造したと思っている『クラウディアカルマ』

実際はレインの刀と入れ替えた完遂形合成刀の一本、心刀『想』<sup>かんすいけいごうせいとう</sup>

ティアナ・ランスター

出身：エルセア

髪の色／眼の色：橙／青

年齢：12

性別：女

利き手：両

魔導師ランク：訓練生（あえて言えばD）

デバイス：アンカーガン

魔力光：オレンジ

術式：ミッド式

趣味：これといって無し（強いて言うならば力の証明）

本作の二人目の主人公

家族は全員故人で天涯孤独の身。親代わりを務めていたティアナの

憧れの存在である兄、ティードは職務中に次元犯罪者に葬られる。その際、彼が所属していた部隊の上官から無能扱いされた事をきっかけに、『兄の魔法は役立たずではない』と証明するため、管理局入りを志す

寮制の魔法学校の出身で、兄の夢でもあった執務官になる事を目標としており、また空戦魔導師を希望していたが、士官学校も空隊にも不合格となってしまった。その挫折を経て当面の目標を陸戦Aランクと定め、陸士訓練校に入校。在校中のパートナーとしてスバルと、そして部屋が同じになったセーウ、エステルと出会う

使用デバイスは自分で造ったカートリッジシステムを付けたミッド式の銃型デバイス『アンカーガン』

セーウ・アストレイ CV：斎賀 みつき

出身：不詳

髪の色／眼の色：黒／琥珀

年齢：15

性別：男

利き手：左

魔導師ランク：訓練生（剣術のみならばB+。魔法のみならばB）

デバイス：レーヴェ

魔力光：月光色

術式：古代ベルカ式



趣味：読書

本作の準主人公

ミッドチルダでは珍しい黒髪に琥珀色の瞳を持った少年  
冷静沈着で大人しい性格だが戦闘では常に相手の二手、三手先を読  
んで行動する

いつも突っ走りがちな相棒、エステルをたしなめる役回りが多い  
密かにだがレインに憧れており、彼を目指して日々、鍛練し続けて  
いる

魔法と双剣を扱うがどちらかといえば剣術の腕の方が上。魔法も  
人並みに扱えるがそれでも本人にはまだまだ、らしい

使用デバイスは黒と白の片刃の双剣型デバイス『レーヴェ』

名前と姿の由来は『空の軌跡シリーズ』の主人公『ヨシュア・ブラ  
イト』から

エステル・テーゼ CV：神田 朱未

出身：不詳

髪の色／眼の色：茶／緋

年齢：15

性別：女

利き手：右

魔導師ランク：訓練生（あえて言えばC）

デバイス：クローディア

魔力光：太陽色

術式：ミッド主体のベルカ混合ハイブリット

趣味：ブーツ集め キャンプ

本作の二人目の準主人公

茶髪をツインテールにした緋眼の少女

向こう見ず、お人好しなどの元気娘でどんな状況でも諦めない闘志  
を持っている

幼い外見とは裏腹に魔法の腕は新人にしては相当なもので身の丈以  
上の<sup>マジックスタッフ</sup>棒術杖を自在に操り、相棒のセーウと鍛練している

セーウとは幼馴染みであり、呼吸もぴったり

使用<sup>マジックスタッフ</sup>デバイスは棒術具と魔法杖を組み合わせた棒術杖、『クローデ  
イア』

名前と姿の由来は、『空の軌跡シリーズ』の主人公『エステル・ブ  
ライト』から

ネロ・クラディウス CV：丹下 桜

出身：クラナガン

髪の色／眼の色：金／碧

年齢：14

性別：女

利き手：右

魔導師ランク：訓練生・陸戦A

デバイス：グノシウス

魔力光：緋色

術式：近代ベルカ式

趣味：芸術鑑賞または創作

本作の第一幕の敵（？）役

クラディウスという有名な家柄を持ち、実力もある人物

『稀代の魔剣士』と呼ばれ他の訓練生と比べ、ずば抜けた實力を持ち、誰もが新時代の英雄になる魔導師であると訓練生からは尊敬されて、訓練教師からは誰よりも期待されているなど、スバルとは正反対な立場

自身を至高の芸術と謳いながら、あらゆる人々の人生も美しいと讃える暴君である

スバル達を見下すような言い方をするときがあるがそこまで仲が悪いわけではない。むしろ本音を話し合える者になっていく

夢は伝説の英雄と呼ばれる三剣神

“黒き剣聖” レイン・アスハ

“剣帝” 久遠寺 森羅

“剣姫” 久遠寺 咲夜

をも超える次元世界最強の魔剣士になること

使用デバイスは、緋黒く輝き奇妙に捻れた刀身を持つ大剣型のデバイス『グノシウス』

名前の由来はローマ皇帝の『ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストウス・ゲルマニクス』

姿の由来は『Fate/EXTRA』の『赤セイバー』から

タマモ CV：斎藤 千和

出身：不詳

髪の色／眼の色：赤／金

年齢：不詳

性別：女

利き手：両

魔導師ランク：無し

魔力光：黄金

術式：不詳

趣味：ダンナ様探し

本作の第一幕の敵(?)役

青い導師服に狐耳・尻尾というエキゾチックな容姿のネロのパートナー

正体はネロの使い魔。素体は珍しい九尾の狐。しかし人型の時は尻尾は一つ

少々毒のある性格だが主に対しては忠誠を貫き通す……はずなのだが主であるネロに何故かなついていない。むしろ様々な所で対立している変わった使い魔

戦闘時には不思議な印が描かれた札で魔法を発動する

名前の由来は『今昔画図続百鬼』に描かれている架空の美女『玉藻の前』

姿の由来は『Fate/EXTRA』の『キヤス狐』から

スコール・ストライフ CV：石川 英朗

出身：第九十七管理外世界『地球』フランス

髪の色／眼の色：黒／蒼

年齢：25

性別：男

利き手：右

魔導師ランク：空戦S+

デバイス：グリーヴァ

魔力光：鈍い銀色

術式：近代ベルカ式

趣味：スノーボード バイク

本作のリーダー役（原作で言えばはやてポジション）

第444魔導戦士部門の部隊長を勤める  
ソルジャー

階級は一佐

気合いだけでAAA級魔力弾を掻き消すなど、魔力を使わなくとも  
とんでもない実力を持ち過去に二桁の仲間だけで四桁の敵を殲滅し  
た事から獅子の魂を持つと言われ『ライオンハート』という二つ名  
を持っている

使用デバイスはブレード部分にカートリッジを取り付けた銃剣型デ  
バイス『グリーヴァ』  
ガンブレード

名前と姿の由来は『FF?』の主人公『スコール・レオンハート』

から

レイン・アスハ

出身：不詳

髪の色／眼の色：黒／黒

年齢：不詳（実際は19歳だがほとんどの者が年齢を知らないため）

性別：男

魔導師ランク：総合SSオーバー

趣味：調理 鍛冶 裁縫 鍛練

本作及び『リリナのcrime』に出てくるほとんどの人物たちが憧れ、目標としている伝説の英雄

元は普通の学生として生きており、黒髪に感情の無い黒瞳と顔、耳に付けた金色のピアス。春夏秋冬着ている黒衣がトレードマーク  
剣と魔法の腕は超一流で、SS以上の実力を誇る

様々な武具を扱えるがそれなどはほとんど二流止まりで、超一流なのは剣術と魔法と素手による無刀だ

6年前のフェイト達の世界の海鳴に訳あって飛ばされてしまいそこで『JS事件』及び『闇の書・罪人事件』<sup>ジュエルド  
シン・ウラノ</sup>の中心をほぼ一人で解決

した功績から

<sup>シャドウローブ・エンジェル</sup>

“黒衣の天使”

“黒夜叉”

そして古代ベルカの言葉から

“ 黒き剣聖 ”

と呼ばれてる

その正体は高次存在グイナと呼ばれる人より上位の存在。その中でも最高クラスの天使と悪魔から生まれた人を超えし者

しかし天使と悪魔という交わるわけのない者同士から生まれた為か、身体は人、精神は高次存在グイナという半高次存在ハーフグイナとなっている

本作は名前のみ時々登場する

## 登場人物紹介 其の壱（後書き）

という訳で、今回は主人公格、スバルとティアナ。重要オリキャラ人物としてセーウ、エステル、スコール、ネロ、タマモ。そして英雄としてレインの紹介となりました

紹介文というのはなかなか難しいものです

正直に言いますと、ティアナの紹介文なんて、まんま正式プロフィールから取っていますから

それに紹介内容と本編での性格が違ったりする時があるなど、いい加減な事になりかねないので大変です

前書きでも書きましたが、今回はレインとスバルの出会いです

これだけはほとんど『ETERNAL』と同じような内容なので、すぐに書きあがると思います

それでは、次回をお楽しみに

小さい頃の私は、泣いているばかりの弱虫だった

自分の事に泣いて、苛められて泣いて

いつもいつも、泣いていた

だけど、あの人だけは違った

私を慰めるんじゃなく 褒めてくれた

だから私は

『リリカルなのはSoldiers』 The crisis

of crime

ソロ・ホープ・ガール

序曲 決意の独想曲

英雄との出逢い

それが私の運命を変える瞬間だった



## 追憶ノ零々英雄と少女（前書き）

どうも、風花です

さて、今月今宵からとうとう新たな物語が始まります。主人公は、先の人物紹介でも予告しておきましたが、スバルとティアナです。原作キャラや『リリナのcrime』のオリキャラはまったく登場せずに、次々と新キャラが登場していきますのでお楽しみに。とりあえず今回は序章。物語に至る為に起こった始まりを書きます。つまり以前に書いた部分に加筆して出した、という事です。出来得る限り、『起承転結』を意識して書いていきたいですが……無理でしょうね（笑）

それでは、まずは前口上をどうぞっ

むかしむかし                      あるところに、一人の少年がいました

少年は、ふとした事がきっかけで次元を渡り                      事件に巻き込まれました

事件の名は『J・S事件』。そして                      『闇の書・罪人事件』  
シン・ウラノ

二つの事件の根本を一人で解決した少年はいつしか英雄と呼ばれるようになりました

その力は、魔導師ランクSSオーバーと言われ、魔法があってもなくても最強と謳われる剣聖

黒き                      剣聖

ある者は 尊敬し

ある者は 夢と憧れ

ある者は 英雄を認めず

ある者は 目標に認識され

ある者は 運命を変える事になった

これは、英雄に救われ、憧れた少女とその仲間が織り成した追憶の物語

彼女達が出逢い そして機動六課に出向するまでに起きた

ひどく悲しい 幻想物語

自伝外伝幻想伝

『リリカルなのはSoldiers』 The crisis  
of crimeのはじまり、はじまり

## 追憶ノ零々英雄と少女

新暦0071年四月

ミッドチルダ臨海第8空港

そこでは炎がまるで生きているかのように暴れ回っていた  
後に謎の火災によると公表されたが真実はロストログアによるもの  
だった

緋色の炎が空港を包み込む。救助局員が消火活動をしているが、炎  
が収まる気配はない

「ダメだ！ これ以上は無理だ！ 引き上げよう！」

一人の局員が叫んだ

「だが、まだ中に子供がいるんだぞ！」

仲間に振返りながら、局員が叫んだ

同・空港内

一人の少女が炎を避けながら歩いていた

「お父さん……お姉ちゃんどこ！」

泣きながら、しかしまわりに伝わるように大きな声で父親と姉を呼ぶ  
身体中煤で黒くなって炎の熱で大量の汗がでていた  
その時少女の近くで爆発が起こった

「きゃあああああああつ！」

爆風を受け悲鳴をあげながら少女は軽く吹き飛ばされてしまった。  
大きな石像の前で倒れた少女は泣きながらも必死に身体を起こす

「痛いよ……怖いよ……誰か助けて……！」

そんな少女の絶望からでも助かるうという、願いは誰にも届かず代  
わりに後ろにある石像にヒビが入る。ヒビは広がりわずかに傾く。

その音で少女は後ろを振り返った  
そして

石像が少女に向かって倒れてきた

「ひっ………！」

少女は、短く悲鳴を上げ眼を閉じ頭を抱えた  
その時、

「あぶない！」

どこからか声が聞こえた気がした  
走る音が近づき少女は誰かに抱き抱えられる

「っ………！ 大丈夫か？」

「大丈夫みたいだよ。ところどころ汚れているけど怪我はないみた

いだね」

なにか鈍い音が聞こえた後、また声が聞こえた  
さっきの声と違う声。少女はおそろおそろ眼を開け顔を上げる  
眼に映ったのは黒髪黒瞳こくどうの耳に金色のピアスをつけた青年

この青年こそ六年前、管理外世界で起こった『ジュエルシード J・S事件』及び『シン・ウラノ 闇の書・罪人事件』を解決した伝説の英雄の一人 レイン・アス  
八。その強さはSSランクを超えており、人々から“黒き剣聖”、  
“黒夜叉”シヤドー・ローフ・エンジェル “黒衣の天使”等、様々な二つ名で呼ばれている

だが少女はその時レインの事を知らなかった  
少女を片腕で優しくも強く抱き締めもう片腕は倒れてきた巨大な石  
像を受け止めていた

石像を横に流し捨てるとレインは少女を降ろした  
辺りを見渡し外に出られそうな場所を探す

「……どこだ……暑い」

無表情でしかも汗すらかかずそんな事を言っているので本当に暑い  
のか不思議である

「あの……お兄ちゃん」

「なんだ」

「えっと……その……」

少女は何か言いたげだったがレインは再び抱き抱える

「出口らしき場所を見つけた……しっかりつかまっている」

「う、うん」

少女が自分にしっかりつかまったのを確認するとレインは通路に向かって走り出す。そのまま勢いを落とさずに通路にあった窓に飛び込む

運良く建物の外に出られたが、

「やばいな……」

「うそっ……」

どうやら二階だったらしく、

「きゃあああああああ……」

二人仲良く落ちてしまった。辺りには少女の叫びが木霊した

「痛いな……」

「大丈夫？ お兄ちゃん」

「ああ……」

落下した二人は無事らしく建物から数百m離れた場所にいた  
レインは建物を見ながらこの子をどうしようか考えていた  
レインを眺めていた少女がふと、ポツリと言った

「お兄ちゃんは凄いなあ」

「何故……？」

建物を見つめながらレインは聞き返す

「私…… 火事の中で泣くことしかできなかった……」

そう言いまた少女は泣く

少女の泣き声を聞きレインは「こういうのは苦手なんだけど  
と愚痴りながらも少女のほうを向き少女の目線までしゃがむ

「そんなことはないと思う」

「え……？」

泣きながら、嗚咽を漏らしながらもレインに顔を向ける

「君は誰かを探していたんだろう？」

「う、うん…… お父さんとお姉ちゃんをさがしていたの」

「なら、それでいいんだ。あの炎の中、家族を探すだけでもすごく  
勇気がある。泣いていたっていい。諦めないで探し続けたことは誇

「つていいんだ」

「お兄ちゃん……」

レインは少女に頷くと少女に聞こえない声で何かをつぶやいた。途端レインの手の中に光が集まる。光が消えるとそこには琥珀色の零型ペンダントがあった

「これは……？」

「これは……お守りみたいな物だ。自分の決意を曲げないお守り」

そう言うとレインはペンダントを少女の首にかける

「ありがとう、お兄ちゃん」

レインは口だけ笑い少女から離れると空を向く。少女もつられて見上げる

その時こちらに向かってくる白い点を見つけた。だんだん近づいてきて白い点が人であること、デバイスを持っていること、白いバリアジャケットで身を包んでいることがわかる

二人とも      レインは出会っていない、少女は顔が見えない

知らなかったが

彼女の名前は高町    なのは

階級は二等空尉で二つ名は“エースオブエース”

「お兄ちゃん！    助けが来た……よ？」

少女は横を見るがそこには何故かレインの姿はなかった



「あれ？ …… お兄ちゃん？」

今さっきまでいたのに消えてしまうようになってしまった。  
まるで少女じぶんを助けるためだけに現れた黒衣の天使みただった。少女は悲しげな表情を見せるがすぐに消し決心を口にする

「私もお兄ちゃんの様に誰かを助けられる人になりたい」

首にかけていたペンダントがその気持ちに応える様に輝いた

炎の中、逃げる事しかできなかった私を救ってくれた黒髪のお兄ちゃんが教えてくれた。どんなに情けなくても自分の信じた行動を誇っても良いって

だけど私は今のままじゃ弱いまま……だから私は強くなりたい

自分の危険を顧みず私を助けてくれたお兄ちゃんのように私も誰かを助けたい……

それが少女      スバル・ナカジマの心からの自分の想い……決意  
だった

## 追憶ノ零々英雄と少女（後書き）

というわけで、最初は久しぶりに短い、スバルとレインの出会いからです

当初は、もう少し長めに書く予定だったのですが、再構成の結果、記念すべき第一話はこのようになりました

そして、次回から第一章で、場所はミッドチルダ北部第四訓練校  
うわぁ、アニメでも出たかどうか分からない漫画だけの名前です。  
もう一度、漫画版の『リリカルなのはStrikers』や他の方々が書いてらっしゃる訓練校を読み直して学校としてどうにかしなければ……

そういえば、地理的説明はどうすればいいのでしょうか？ 十字の上  
らへんと考えてくだされば大丈夫でしょうか？

次回からは、スバルがパートナーや仲間達と出会い、訓練校ではどんな立場が決まります。本編に続いて登場するキャラもいますので、お楽しみに

それでは今話はこれで。次話は早ければ零時に。遅くても明日中には皆様、御機嫌よう

あの事件から一カ月後、私は訓練校に入学していた

パートナーは私より一歳年上の女の子  
リムメンバー  
部屋仲間は更に年上の男女

戸惑うことがあるかもしれないけど

私は この人達と強くなっていきたいです  
だけど 待っていたのは……

次章、第一幕 ミッドチルダ北部第四陸士訓練校  
初めての壁 それはいつか友と呼べる、美しき男装の麗人だっ  
た

## 追憶ノ巻　始まる為の（前書き）

こんばんわ、風花です

今宵から本格的に物語が始動します

場所は原作同様第四陸士訓練校

ただし、変更点としては

- ・スバルが入学したのは、火災から一カ月後
- ・その時期にティアナも入学している

この二点です

一年も早く入学するのは少し無理があるようですが、出来れば気にしないで下さい

それでは訓練校編、その第一歩をどうぞっ

## 追憶ノ巻　始まる為の

一ヶ月後、スバルはミッド北部に点在する訓練校、その中の第四陸士訓練校に入校した

この一ヶ月、スバルは自分の弱さから眼をそらすのを止め、レインに近づこうと一心不乱に剣術修行に励んだ

だが流石に魔法を練習しない　十一の少女がする修行にしては

あまりにも苛烈というほど激しいモノだったらしい　スバルを

ギンガが心配して無理矢理訓練校に入校させたのだ

式が終了し部屋を確認する。同じ部屋になった者通しがこれからの相棒になるのだ

「私はえーつと……」

「「32号室……」」

誰かと同時に言った

声のした方を見るとオレンジの髪をツインテールにした少女が自分を見ていた

「……32号室？」

「あ、はい！ 私、スバル・ナカジマって言います。十一歳です。よろしくお願いします！」

「ティアナ・ランスター、十二歳。……よろしく」

ティアナはそう言うと部屋に向かおうとする

慌ててスバルも追おうとした時、後ろから教官が2人を呼んだ

「ああ、<sup>ルームテンバー</sup>部屋番号32号室の二人」

呼ばれたスバルとティアナは教官の所に向かう

「何でしょうか？」

「すまないが君たち30号室の二人と相部屋になってくれ。もちろん、大部屋の40号室を手配するから」

「はあ……」

スバルとティアナはさして嫌そうでもなく運が悪かったと考え言われた通り40号室に向かった

スバルとティアナが自分の部屋に入り荷物を整頓していると不意に部屋の扉が開いた

「ああ、ここか……あ、どうも」

部屋に入ってきたのはスバルたちと同じくらいの年頃の少年だった。髪はこの世界では珍しい黒。瞳は琥珀色

「あんたが30号室の？」

「あ、はい。僕はセーウ。セーウ・アストレイって言います。よろしく」

冷静沈着そうな挨拶にスバルたちも自己紹介する

「私、スバル・ナカジマって言います。よろしくお願いします」

「ティアナ・ランスターよ。……それで？ 相棒はどうしたの」

二人の自己紹介に頷いたあと、セーウは申し訳なさそうに言った

「丁寧語はなしにしようか？ 同期なんだから。……エステルは

あ、エステル・テーゼね 僕に荷物だけ押し付けて先に訓練場に行っちゃった」

「そう。スバル、だっけ？ あたしたちも行きましょう」

「はい……じゃなくて、うん」

スバルが頷くと三人で訓練場に向かった

この出会いが短く、しかし長きに渡って続いてしまうことをこの時のスバルたちは考えもしなかった

スバル達は訓練場に着いた

訓練場には既に多くの訓練生が集まっていた

そのほとんどが指定されたデバイス ミッド式なら短杖か長杖。

ベルカ式ならポールスピアを持っていた

その中で、一人杖らしからぬ杖を持っている少女がいた

身の丈以上ある端が白い以外は赤一色に染められた棒で真ん中に宝石が埋め込まれていた

セーウはその少女に近づいて呼んだ

「 エステル」

名を呼ばれた少女はこちらを振り向いた

長い茶髪をツインテールにした緋眼の少女だった

「あ、セーウ遅いわよ」

「君が僕に荷物だけ押し付けて行くからそう感じるんだよ。まだ同じ部屋になる人と挨拶してないのに……」

「あはは、ごめんごめん。……それじゃあ、後ろにいるこの二人が同居人？」

エステルはセーウの後ろにいたスバルたちを指差しながら聞いた  
スバルたちは慌てて自己紹介する



「スバル・ナカジマです！ よろしく……ね？」

「ティアナ・ランスター……よろしく」

「スバルにティアナ……ね。あたしはエステル。エステル・テーゼよ。よろしくね！」

スバルとティアナの自己紹介にエステルも元気よく挨拶すると、自己紹介が終わった時、入口付近で待機していた教官が喋り始めた

「これからお前たちの実力を測る！ 各地に配置され襲いかかるターゲットをパートナーと協力して撃破しろ！ 通常では二十機で素質があると見なされるが、今回は五分以内で倒した機体が十機以下なら問答無用で失格と見なし、罰として腕立て伏せ五十回はさせてもらう！ 良いな！」

「……はい！」「……」

教官の掛け声に訓練生達は大きく返事をする  
そんな中、スバルは念話でティアナとパスを開きながら言った

「（あの……ランスターさん……）」

「（……何？）」

「（実は……私、戦闘用の魔法が一つしかないんだけど……）」

「（………は？）」

その告白にティアナは呆れた

魔法が一つしかない？

あり得ないと思うティアナをよそに訓練は始まった

ある者はぎりぎり合格し、ある者は失格となり、またあるものは余裕に合格する

様々な戦い方を眼に焼き付ける二人

その中で、スバルには魔法ばかりを頼って無理に合格を狙おうとしていると感じていた

そして、

「次イ！ 部屋番号<sup>ルームナンバー</sup>40、セーウ・アストレイとエステル・テーゼ！」

セーウとエステルの番がきた

二人は意気揚々と外に出た

「それじゃあ、いっくわよう！」

「無茶しないでね」

「あ、エステルがんばれ！」

スバルの声援にエステルは手をぶんぶん振りながら対応する

「行こう、レーヴェ」

「よろしくね、クローディア」

互いに自分の愛機に声をかけるセーウとエステル

セーウのデバイスは幅広い刀身を持つ片方が黒、もう片方が白と言う双剣型のレーヴェ  
柄に深紫の宝石が埋め込まれており、どこか禍々しさを漂わせるが美しくも感じさせる

エステルのデバイスは先ほどから持っていた赤い<sup>マジックスタッフ</sup>棒術杖型のクローディア

赤い棒芯の真ん中には赤い宝石が埋め込まれており、先っぽは白く輝いていた

どちらとも、二人が昔から使っている大事な相棒なのだ

「それでは……ミッション、スタート！」

教官の合図でターゲットである機体は次々と襲いかかるがセーウたちは動かずに機体を見ていた

「エステル、僕が右三機に始まりどんどん行くから後ろから支援をお願い。余裕があれば君も出て？」

「りょーかい！ サン・ライズ！」

エステルは頷くとクローディアを振り上げ、魔力弾を空高く上げる  
魔力弾はある程度まで上がると、

輝ッ！

弾け、太陽のような閃光を発した  
それは的確に機体の視界を遮り、セーウの接近を許した

「はあああつ！」

斬ッ！

セーウは右の機体から斬り倒す  
機体には『アンチマジリングフィールド<sup>F</sup>』が搭載されているが魔法  
で切れ味をあげた刃にはまったくの無力だった

「ルナ・クレッシェンド」

刃を機体に突き付け、中から月光色の魔力を爆発させ機体を破壊する  
エステルもセーウが走ったところをピッタリと付いて、後ろから他  
の機体を破壊する

その息の合った動きにスバルも息を呑む

（すごい……あんな風に戦うなんて……）

あっという間に五分が経過し、セーウとエステルが倒した機体はジ  
ヤスト八十三機だった

「すげえー。あのコンビ、とんでもない連携だな」

他の訓練生も驚嘆の声を上げている  
特にスバルはセーウの剣術に見蕩れていた

（あの、流れるような静の動き……それに合わせたような魔法剣技。

剣術なら渡り合えそうだけど魔法は負けちゃうな)

そしてとうとうスバルとティアナの番がきた

「次つ、同じく部屋番号<sup>ルームナンバー</sup>40、スバル・ナカジマとティアナ・ランスター！」

「はい！」

スバルとティアナは返事をして訓練場に向かう

訓練場に到着するとティアナはホルスターにしまっていた銃型デバイス『アンカーガン』を取り出す

「そういえば、あんたのデバイスは？」

「あ、私は……これ」

スバルはティアナに聞かれると胸のペンダントに触れた  
すると光が集まり消えるとそこには黒一色の刀が存在した  
これがスバルのデバイスであり、自分とレインを繋ぐ道しるべ  
銘はクラウディアカルマ  
それを見てティアナはぽつりと呟く

「あんたも剣士型……前衛なのね」

「うん。あ……それで、魔法のことなんだけど……」

「……使える限りで良いわよ」

ティアナはそう言いきるとアンカーガンを構える

それを見てスバルもクラウドディアカルマを腰に差し抜刀した  
刀身は漆黒に染め上げられおり、刃文も何もかもが黒かった  
それをスバルは額の前に持つてくると眼を閉じながら呟いた

「諦めない……泣いてもいい　どんなに格好悪くても自分の誇りは手放すな」

それはかつてレインがスバルに言った言葉のスバルなりの解釈だった  
ティアナにも聞こえたのか念話で言われた

「（……良い言葉ね）」

そして訓練が始まった

ターゲットである機体はやはり次々と襲いかかる

ティアナは動かず、念話でスバルに指示を出す

「（即席の私たちにさっきみたいなことは絶対無理だからあんたは好きにやりなさい！　私が討ち漏らした機体を狙い撃つ！）」

「（お願い！）……ふっ」

スバルは一息だけ吐くと左右の機体は無視し真ん中だけに集中し突撃する

もちろん左右の機体は襲いかかってくるがそれらは全てティアナの射撃で落とされた

そして、スバルの間合いに入ると……

「……緋凰一閃」

斬ッ！

黒い魔力を纏った斬撃を放つ

その斬撃は『AMF』を簡単に抜け、機体を真つ二つにした爆発した機体の後ろから新たな機体がスバルに殴りかかる  
だがスバルはその攻撃を身体を捻りながら避け、斬りつける

「りゅうかんせん  
流巻閃」

閃ッ！

高速の回転剣技が炸裂し、機体は今度は横に真つ二つになる  
回転の軸とは逆の足がつくと同時にスバルは居合いの構えを刹那に取る

「はあああつ！」

軸足が地に下りると同時に高速で抜刀する

斬ッ！

斬ッ！

斬ッッ！！

その見えない斬撃、計三撃  
しかし、機体に刻まれた傷は、

斬ッ 斬ッ 斬ッ 斬ッ 斬ッ 斬ッ 斬ッ 斬ッ 斬ッ！！！！

十閃にも及んだ

その凄まじき剣術にティアナは思わず見蕩れていたがすぐにふるふると頭を振り、スバルに襲いかかる左右の機体を落としていくそして……

ピーッ！

終了アラームが鳴り、スバルは背後でクラウドディアカルマを鞘に納めてふーっと息を吐く

ティアナも息を吐きながらアンカーガンホルスターに納める

二人の間には斬られ、撃たれた機体の残骸が転がっている。その数、推定百強

他の訓練生は呆気にとられている。魔法を使わず剣術だけでここまでやることに

セーウやエステルもこれには驚いていたが……

「馬鹿者がああああああっ！」

「ッ！？」

突如、教官の怒鳴り声が響き渡る

無理もない。これは剣術の訓練ではない

あくまで魔導師の魔法を鍛える訓練である

「剣士ならばいざ知らず 魔導師なのに何故魔法を使わん！  
いかに剣術が優れているとは言え魔法を無視するとは何事か！」

「あつ……す、すみません」

「罰として腕立て百回！ 連帯責任としてパートナーもだ！」



「は……はいつ!」

これを見て他の訓練生もスバルの魔法に頼らない剣術には、嫌気がさしている

同じ魔導師なのにどうして魔法なしであそこまで強いのか納得できず、卑怯をしたのではないかと思いつく

ティアナはこんな相棒を横眼で見ると油断するんじゃないや、

これは早めに矯正させないと……などと考えてため息を漏らしていた

## 教官室

多くの教官が上司との話し合いをする普通校ならば職員室と呼ばれる部屋

今は訓練生の成果、新たな訓練方法など様々な事を会議していた  
そこで話題になっていたのはスバル・ナカジマを含め、刀型、剣型  
デバイスを使う者について

“黒き剣聖”

“剣帝”

“剣姫”

俗に言う三人の“剣の名持ち”、通称、三剣神が現れてから刀や剣型デバイスを使う者がちらほら出てきたからだ

「あのスバル・ナカジマは時空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校始まって以来の問題児だ！」

「確かに、スバル・ナカジマは剣術を頼るばかりに魔法を一切使用しない！」

「セーウ・アストレイはまんべんなく二つを使うがそれでも剣術に傾倒している！」

「それに比べて部屋番号<sup>ルームナンバー</sup>27、ネロ・クラディウスの優秀さと言ったら……」

「そうだ。彼女ほど魔法と剣術を両立させて尚且つ、魔導師としての誇りを持っている者はいない！」

いつの頃からか話題は問題児より優等生の話になっていた

誰があーだ誇りを持っているとか、この者がこんなにも魔法だけに頼っているとかまるでただの世間話だ

その中で一人だけスバルとティアナ、セーウとエステルが写された資料をジッと見ていた

「訓練初日から倍の腕立て……油断するんじゃないわ」

「あ、あのホントごめん……」

「謝らないで、鬱陶しい」

教官達が自慢話に花を咲かせている頃、部屋ではスバルがティアナに謝り、ティアナは不機嫌そうにパンパンになった両腕をさすっていた

セーウとエステルはスバルたちのことを考えて晩御飯を取りにいていた

良い意味でも悪い意味でも有名な四人は色々と危なそうだからだ

「ってか、あんたホント、魔法の類いを使わなかったわね。まさかとは思ったけど」

「うん……私のおねーちゃんが魔法を練習しない私を見てここに入れたから、いまのところ一つしか使えないんだ」

「それって……あの黒い斬撃？」

ティアナは今日の訓練で自分が確認できた唯一のそれを魔法と聞いてみた

「うん、《緋凰一閃》って言うんだ。あ、剣技ならたくさん出来るよ」

「ふーん……」

と、談義に変わった頃、部屋にお弁当を大量に持ったセーウとエステルが戻ってきた

「ただいま」

「ただいま……ああ、重い……」

セーウは対して疲れを見せていないがエステルは疲れてテーブルに弁当を置くと床に寝そべった

それもそのはず、二人合わせて十数個ものの弁当を持ってきたのだから

「スバル、これぐらいでいいかい？」

「うん　ありがとセーウ、エステル」

スバルは喜びながら弁当に飛びついた

「　　自分の目標？」

スバルは十箱目にフォークを刺しながら聞き返した  
今晚のメニューは《学食特製Aランチ》  
ちなみに他のメンバーは既に食べ終えている

「そう。自分の目標。ちなみに僕は現在、空戦Aランク」

「セーウって知り合った人に必ず聞くのよね」

エステルにそう言われ全員が考えてみた  
自分の目標に

だがティアナだけは表情を変えずに何かを言う

「アストレイ訓練生……悪いけど……」

「もちろんこれは同じ部屋のパートナーとして聞きたいだけ。むやみにプライバシーに関わる事は聞かないから」

「……………。私の目標　　到達地点は執務官よ。だけど今は陸戦Aランク」

ティアナは拳を握り締めながらそれだけ言い黙った

セーウは深追いせずそこで「そっか。ありがとう」と言った  
次にエステルが目標を語る

「あたしはそこまで決まった目標があるわけじゃないけど……強い  
てゆーなら、セーウと有名なコンビになることかしら」

「君は変わらないねエステル」

セーウが苦笑しながらスバルを見る

最後のスバルは何て言おうか悩み、率直に言うことにした

「私は……私はレインさんみたいに誰かを護る力が欲しい、かな」

「……………え？」

レインの名が出ると三人は驚きの声を上げた

スバルは俯いていたため、判らなかったが一番驚いていたのはセー

ウだった

だが、構わずスバルは続ける

「一ヶ月くらい前……空港一個まるごとダメになった事故に私、巻き込まれちゃって……その時、レインさんに助けられたんだ  
その時、レインさんに言われた言葉があるの」

泣いていたっていい。諦めないで探し続けたことは、誇っていいんだ

「私を怒るところか褒めてくれて、それからこのペンダントをくれた。自分の決意を曲げないお守りのペンダント。だから決めたの。どんなに強くなかったってレインさんみたいに誰かを救えるようになりたいて……」

スバルはその想いを自分とペンダントに刻み剣術を学び始めた  
レインに近付きたいために  
その話を聞いたセーウは

「……………スバル、レイン・アスハ……………さんに会ったの……………」

「う、うん。レインさんが消えちゃった後に助けに来てくれた空隊の高町なのはさんに教えたならレインさんだって」

「……………良いなあ」

ポツリと呟いたセーウ

首を傾げるスバルにエステルが助け船を出した

「セーウ。実はこんな冷静沈着なのにレインさんに密かにあこがれているのよ」

「そりゃあ、そうだよ。レインさんは僕たち刀や剣を使う人たちにとって憧れ以上の存在なんだ」

セーウはいつになく熱く語る

それを見てスバルは「やっぱりレインさんって凄いなあ……」と思った

その時、それまで黙っていたティアナが口を挟んだ

「ナカジマ訓練生。レイン・アスハを目指しているのね」

「うん。それが私の目標」

「なら、これからしばらく魔法を練習するわよ」

「……………ふえ？」

いきなりの発言に驚いたように声を上げるスバル

「あんたが憧れているレイン・アスハは剣術も一流だけど魔法も一流なのよ。それにこれ以上、教官に怒られたくないし」

ティアナの意見はもつともだ

スバルはあう、とか何かを言おうとしたが最後にはコクンと頷くのだった

二ヶ月後

スバルはこの二ヶ月間、朝と夜の空き時間にティアナに魔法の練習の手解きを受けていた

その練習にセーウとエステルも付き合っていた

正確にはスバルの魔法取得を三人が手伝い、ティアナの苦手である近接戦闘の基礎を三人が教え、セーウとエステルの連携を二人が見ていた

おかげでスバルは新たに魔法を習得することができた  
それが、

「ブルーエッジ・エクスキューション！」

二十本くらいの魔力で作った水色の剣を相手に放つ技だ  
放った先はセーウとエステルがいる  
だが二人は構わず得物を振るった

「せいっ、はあっ！」

「おりゃああああああっ！」

セーウは二回レーヴェを振るい風圧ごと魔力剣を吹き飛ばし、エステルはクロードディアを豪快に振るい弾き飛ばす  
それで朝練は終了し全員、デバイスを仕舞った

「これで、来週までの課題をクリアする予習は終わりよ。これなら



教官たちにも文句は言われないわね」

「うん、ありがとうランスターさん。セーウとエステルもごめんね？ 私の練習に付き合ってもらっちゃって」

スバルは朝練前に買っておいた飲み物を全員に渡しながらお礼を言う

「別にいい……あんたが怒られると私まで怒られるのよ。それが嫌なだけ」

ティアナは照れを隠しながら言い飲み物を飲む

「ティアナってツンデレね」

「ツンデレじゃない！」

「まあまあ二人とも落ち着いて。それより朝食が込むから早く汗を流して食べに行こう？ 席は僕が取っておくから」

もつともなセリフにティアナとエステルはむう、と呟きながらも頷き三人でシャワー室に向かった

くシャワー室く

スバル達は数多くいる他の訓練生の間を掻い潜り、なんとか服を脱ぎ、個室のシャワールームを確保した

「……………」

エステルはジーツとティアナを凝視していた  
特に胸の辺りを

「な、何よ……」

ティアナは顔を赤くさせながら布で胸を隠す  
その後、自分の胸を見て呟いた

「……年下に負けた（泣）」

どうやら胸の大きさを勝手に争っていたらしい  
一人で勝手に嘆いた後、今度は負けじと

「スバル……！！」

「うひゃあっ！？」

スバルの胸を無理矢理見た  
セクハラ寸前だ

そこでふと胸ではなく胸元に眼がいったエステル  
スバルの胸元には琥珀色の雫の形をしたペンダントが輝いていたからだ

「スバル、お風呂にもそれ持ってきたの？ 濡れて壊れない？」

「あ、うん、大丈夫だよ。レインさんからもらったこのペンダント、防水防火、様々な耐性がついてるみたいなんだ」

「へえ……」

しみじみと呟くエステルを見てスバルは照れたように頬を掻いた

「まあ、その話はおいおいセーウも混じって聞きましょう。今はシャワーシャワー」

エステルは楽しげに言ってシャワールームへと向かいスバルとティアナは苦笑しながら同じように個室のシャワールームへと向かった

シャワールームから出て食堂に足を運んだスバル達を食堂で待っていたのは、

「ですからここには後、三人来るんです。分かりますか？」

「ふん、落ちこぼれの分際どもが余に指図するつもりか？　くだらん、さっさと席を空けよ」

何かを言い争っているセーウと金髪翠眼（加えてアホ毛）の少女がいた

金髪翠眼（加えてアホ毛）の少女の後ろには三人程連れらしき（子

分と言った方が正確だろうか）少年少女が控えている

スバル達は何かあったのかな、と考えながらセーウに近づいた

「セーウ、どうしたのよ。あんた逆ナンされてるの？」

エステルがセーウに声をかける

セーウは振り向くとげんなりとした様子で返した

「逆ナンではないことは確かだね。席を取って待っていたらいきなりこの人達が譲れって言ってきたんだよ」

「あ、あんですって〜！」

エステルが眉を吊り上げながら驚き、少女に近づいた

「ちょっとあんた、何考えてんのよ。セーウが取っていたんだから別の席に座りなさいよ」

「ほう、落ちこぼれの分際で余に齒向かうのか？ 面白い」

少女は不敵に笑うと腕に付けていたブレスレットが光だした光が収まると少女の手には緋黒く鈍く輝いている奇妙な形に捻れた大剣が握られていた

「ちょ、ちょっと！ 何でそうなるのよ！？」

「余を愚弄した罪、万死に値する。せめて喝采の中で墮ちよ！」

「もー！ 話を聞きなさいよー！！」

エステルは喚きながらもクローディアを待機フォームから棒術具の形態に変え、迎撃体勢をとる  
スバルはあわあわと辺りを見ていた

「（あわわ……、ど、どうしようランスターさん！？）」

「（私に聞かれても困るわよ。ちょっとアストレイ訓練生、どうにかできないの？）」

「（……さすがに今から割って入るわけにはいかないし。それに……）」

「（……それに？）」

一旦区切られた言葉を鸚鵡返しに聞き返すティアナ  
セーウは状況を先読みしたのか言葉を口にした

「（もう教官が止めに入ったから）」

その刹那

斬り掛かってきた少女と守りの構えをとったエステルの間に何か  
割って入った

人ではない。複数の紅の球体と銀の刃を持つ刀身  
いきなり間に入った物にエステルと少女は驚きその刃の方を向いた  
視線の先には襟元が白く全体は黒に染められたジャケットに黒のス  
ラックスを穿き、ライオンをあしらった銀の首飾りと指輪を着けた  
この場所には不釣り合いな男性が面倒臭そうな顔で剣を構えていた  
男性の剣は剣の形をしているが柄の部分だけが完全には分らない  
が恐らく八十二連式位の回転式拳銃のトリガーのような形になっ  
ていた

簡潔に男性の武器を表すとしたらさながら  
男性は剣を構えたまま静かに言葉を発した

「デバイスを退け。ここは訓練場じゃない。暴れたければ訓練場で  
やれ馬鹿者。止めないと言っのなら 迷わず引き金を引くぞ」

男性の静かな声はその空間を圧迫するほど重かった  
そこへセーウが声をかけた

「エステル、スコール教官が正しいよ。クローディアをしまつて」

エステルは何も言わなかったが、真っ先にクローディアを待機形態  
に戻した

少女も鼻を鳴らしながら大剣をブレスレットに戻す  
それを見届けた男性 セーウがスコール教官と呼んだ は紅  
の球体を消し自分も銃剣をしまう

「喧嘩をするな。やりたいなら次の模擬戦で決着をつける。いいな  
？」

「はい……」

「……良いだろう」

「よし。ならスバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、セーウ・  
アストレイ、エステル・テーゼは弁当を持って俺の部屋に来い。悪  
いが俺の分も頼む」

一方的に告げるとスコールは食堂から去っていった  
スバル達は説教か何かと思い仕方なく席を少女達に譲り弁当を持つ

て（もちろんスコールの分も）食堂から出て部屋に向かう  
スバル達が食堂から出ていくと遠巻きに見ていた訓練生達はひそひそと囁いていた

「っひえゝ、ひやひやしたぜ、まったく」

「そうだな。しかしあいつら、ネロさんに反抗するなんてバカだよな」

「ああ、まったくだ。いつそのこと全員退学しまえばいいのに」

「無理無理。あいつら剣術しか使えない奴もいるけど座学は基本普通だからさ。成績不振で落ちることはまずねえよ」

「ならネロさんに滅多打ちにされればいいな」

「おつ、それサイコーじゃん」

聞いているだけで嫌気が差してくる発言だった  
スバル達の評判は下がる一方、先ほどの少女  
ウスの評判は更に上がるのだった

ネロ・クラディ

それもそのはず、ネロは現在、在席している訓練生の中でずば抜けて優秀で稀代の魔導剣士  
省略して魔剣士  
と呼ばれ訓練生からは尊敬と憧れの眼で見られ教官達からは期待の眼で見られているのだ

スバル達が部屋の前に到着した  
セーウが代表して扉を叩く

「スコール教官。セーウ・アストレイ以下四名、来ました」

「ああ、入れ」

扉の奥から声が聞こえた

セーウは「失礼します」と礼儀正しく言うと扉を開き部屋に入った  
中ではスコールが長テーブルを挟んで待っていた

「よく来た。まあ、座れ。先にメシだ」

スコールに言われ対面の多人数掛けソファに右からスバル、ティア  
ナ、エステル、セーウの順番に座った

そして何故かそこで朝食が始まった

今朝のメニューは《学食特製Bランチ》

何で呼ばれたのか分からないままだったがスバル達は黙々と朝食を  
食べた

そして食べ終わった

食べ終わるとスコールが話しかけてきた

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺はスコール・ストライフ。  
第444魔導戦士部門ソルジャーの部隊長を勤めている。教官職は臨時だ」

「第444魔導戦士部門ソルジャーだって!？」

スコールが第444魔導戦士部門ソルジャーの部隊長である事に驚きだすセーウ



第444魔導戦士部門ソルジャーを知らない残りの三人は首を傾げながらセーウに訊ねる

「セーウ、第444魔導戦士部門ソルジャーって……何？」

「第444魔導戦士部門ソルジャーって言うのはね……メンバー一人一人が必ずAAAランク以上の機動部隊とはまた違った極秘の戦闘組織なんだ。少数だけど管理局で一番強く、敵味方両方から恐れられている最強部隊だよ。でも……何故そんな方が訓練校に？」

「さあな。内緒だ。ただ、今年は見所のありそうな奴が多く入校したからな。さて、本題に入るか」

スコールはそう宣言すると姿勢を正した

そんなスコールを見てスバル達も慌てて姿勢を正す

「お前達を呼んだのは他でもない……。本日から俺がお前達の専属教官になった報告だ」

「……え！？」「……」

四人は第444魔導戦士部門ソルジャーの部隊長が専属教官になったことに大いに驚いた

予想外の言葉に固まっていたが一番早く解凍したセーウがその理由を聞いた

「あの……理由を聞いても？」

「然したる理由はない。お前達の愚痴ばかり他の教官から聞いていたからどんな奴かと思って見に行けば……、なかなか見所のある奴

だなと思ってな」

「……………」

「まあ、他の訓練より厳しいがその代わり、強くはなれる。それじゃあ、一時間後に第一訓練場に来い。以上だ」

スコールにそう言われスバル達はただ啞然としながらため息を出すように返事をし、部屋を出ていった

## 追憶ノ巻／＼始まる為の（後書き）

最近、考えているんですが……

オリキャラを含めると、かなり男性キャラが多くなってきたんですよね

リリカルなのという話は基本、魔法少女というだけあって女の子が多く登場するんですが、私は比率が半々になっていることに気付きました

そこでこの作品は少し女の子を多くしようと思います（故に初期メンバーが女子三、男子二という比率）

とまあ、そんな事を考えながら書いた今作。若干原作通りの話を加えた物語でした

姉・ギンガの願いで、たった一ヶ月で訓練校に入学したスバル。そこで出逢ったティアナと偶然により同じ部屋になったセーウとエステル

初日に一ヶ月で会得した自分の剣術を披露して立場を決定させてしまふ

新たな教官も現れて、運命は固まっていく……

『リリナのcrime』を投稿してから一年が経過した今日この日に新たな物語の開始を宣言いたしますっ

それでは今宵の私の会話は一先ず、これまで  
次話でお会いしましょう

## 追憶ノ式々修業と試練（前書き）

ふう、何とか一ヶ月で更新できました。ぎりぎりです（苦笑）

昨日新しくゲームを購入したので意識がそちらばかりに向いています。とは言っても諸事情からフィルムさえ破つてないので

今宵は題名通り、修業とスバル達に降り掛かる試練が始まるお話です  
出来る限りシリアスとパロディを混ぜたのですが……上手く出来るかどうか（汗）

しかも最近、書き方を試行錯誤しながら変更しています

例えばデバイス名を『』で表記していたのを取り除いたとか、そんな小さい事を色々

ま、まあそう言った事は置いておきまして

それではどうぞっ

## 追憶ノ式々修業と試練

スバル達は一度部屋に戻ってからスコールが言った第一訓練場に向かっていた

既に訓練服に着替えてそれぞれデバイスを持っている

「それにしてもまさかあの“ライオンハート”に鍛えてもらえるなんてね」

「“ライオンハート”？」

聞いた事のない二つ名にスバルは首を傾げる

スバルが知っているのはレイン・アスハの“黒き剣聖”他、

久遠寺 森羅の“剣帝”

久遠寺 咲夜の“剣姫”

高町なのはの“エースオブエース”

ぐらいなのだから

「スバル、“ライオンハート”も知らないんだ……。ある意味凄いや」

セーウは素直に驚き、代わりにティアナが“ライオンハート”について説明した

「“ライオンハート”って言うのはスコール教官の二つ名よ。十年前、反管理局組織アヴァランチが仕掛けた事で始まった『神羅戦争』を二桁の仲間だけで四桁の敵を倒し、勝利に導いたとされ獅子の魂のような姿にそれを観ていた誰かが名付けたのがきっかけ、だったかしら？ 六年前の『闇の書・罪人事件<sup>シン・ウラノ</sup>』があまりにも世間に広ま

「つたから忘れられてるのよね」

ティアナの説明に驚くスバル

まさかスコールがそんなに凄い人物だったとは

そんな話をしているとスバル達は第一訓練場に着いた

第一訓練場は昨日使用した第六訓練場や他の訓練場とは違い屋内に作られている

スバル達が入ろうとすると、

「おい、その四人」

声をかけられた

振り向くと一人の頭が禿げ掛かった教官が立っていた

後ろには訓練をするのか、数十人の訓練生がいた。確実に先輩だろう

「どこに入ろうとしている。そこは第一訓練場、新人が練習場所として使えるわけないだろう」

「あの……私達、スコール教官に言われここに来たんですが……」

「何を馬鹿な事を言っているんだ。いいからそこをどけ。落ちこぼれと話している暇なぞあるなら彼らに一つでも魔力の大切さを教えなければならんだ！」

スバル達を突き飛ばす勢いで教官が近づくと、

「悪いがそいつらの言っていることは本当だぞアデコール教官」

訓練生の後ろから声が響いた

全員が視線を向けると、そこには黒のジャケットにスラックスの男性  
スコール・ストライプが無情で立っていた

「ス、スコール教官！？　だ、だが第一訓練場は私の受け持つチームが……」

「駄目なら良い。俺達は第零訓練場を使わせてもらう。第一訓練場を約一ヶ月借りる代わりにお前達は第零訓練場を使って構わないんだが？」

「だ……第零訓練場！？　それは学長の許可無しでは……」

「それも許可済みだ。どうする？　二ヶ月足らずの新人に第零訓練場を使わせるか、お前達が第零訓練場を使うか」

「わ、分かった！　　すまないが移動だ。私に付いてこい！」

アデコール教官と呼ばれた男性は、慌てて踵を返し訓練生を連れて廊下に消えて行く

訓練生達はわけの分からないまま付いて行つた

スコールはそれを見届けるとスバル達に向き直る

「それでは修行を始めよう。中には入れ」

「は、はい」

スコールに導かれるように中に入る四人  
中は真つ白な空間に包まれていた

「この第一訓練場は次元航行艦であるアースラや管理局本局に設備されている訓練場と同じように作られている。SSS以上で暴れようともすぐに壊れはしない」

スコールはモニターを出し何かを操作する

「まずは、俺から見たお前達の評価だ。まず エステル」

「はーいつ」

いつもと変わらず無情の眼でエステルを見つめるスコール

「お前はこれまで色々な補助魔法を使っていたが前衛同士のコンビでは少し数が多い。最低限まで減らしその分の魔力を温存しろ」

「うつ……ふぁーい」

「次にセーウ。お前は特に注意点はない。強いて言えば素早さを高める。ヒット&amp;amp;アウェイがこれからの戦法にすると良いだろう」

「はい！」

次々との確に言っていくスコール

次はティアナだった

「ティアナは最初から魔力を出しすぎている。配分を考える。後は護身術程度の近接戦闘だクロスレンジが……、これはまだ良いだろう。武装隊というセンターガードの役目のティアナは司令塔及び戦術師という大任を頑張って身に付けてくれ」



「……………はい」

「最後にスバル」

スコールはスバルを向いて評価を下した

「はつきり言つてスバルは剣術だけならAAクラスものだ。だが、この管理局は魔法せかいが使えないと生きていけない。できる限り魔法と剣術を混ぜて使え」

「が、頑張ります!」

「後は歩行術だな。スバルの剣は居合い 抜刀術が多い。抜刀術は剣術の究極形だ。故に足運びは重要だ。何かしらの歩行術は会得してるか?」

「えっと……まだ自力じゃ難しくカートリッジシステムの助けがあれば」

スバルはそう言うときクラウドのペンダントから取り出し、  
薬莢ケースを一つ排出する

すると突如スバルが消え一瞬の内にスコールの後ろに現れた  
スコールは冷静に判断しティアナとエステルは眼を真ん丸にしながら驚きセーウはしっかりスバルを捉えていたのかすぐに背後に眼を向ける

「なるほど。歩行術最高峰『縮地』だな。まだ未熟な所があるから瞬動止まりだが」

「そう、ですね。今は一回のロードで八回移動できますが最終的にはロードなしでやりたいと思ってます」

スバルはクラウディアカルマをしまつと目標を宣言する

縮地（瞬動）

強靱な脚力で、初速からいきなり最高の速さに達する足運びで俗に瞬間移動とも言う

ある者は神に選ばれた者だけが使える特殊能力と言うが実際は健脚を持つ者なら鍛練すれば誰でもある程度は扱える武術なのだ

基本は瞬時に相手との間合いを詰めたり、相手の死角に入り込む体捌きを指しているがスバルの場合はそれに加えて、姉であるギンガが使用するストライクアーツを織り込んで床、壁、天井など三次元での長距離縮地もとい瞬動を編み出したのだ

閑話休題

「まあ、今の瞬動は本場の瞬動じゃないが……いいか。以上がお前達の評価だ。それをふまえてお前達四人にはある訓練をしてもらつ」

スコールがパチン、と指を鳴らすと突如訓練場の中央に巨大な魔方阵が展開され中心からソレは出てきた

ケンタウロスのような風貌

四本の腕には剣が取り付けられ

全身は鋼鉄の如き甲冑を身に纏い、鈍く輝きを発していた  
そして、ソレの大きさは 推定十m強

「……………（パクパク）」

「嘘でしょ……………!?!」

「……………あの、何ですか？　これ」

あまりの衝撃にスバルとエステルは口をパクパクさせティアナは思わずといった様子で呟きセーウは呆然とスコールに尋ねた

「これは以前、敵陣破壊の任務で出掛けた時に見つけた殺戮兵器だ。正式名称、魔導専用殺戮破壊兵器ステンシルプリンガー。ちなみに魔導師ランクはSくらいだ」

「殺戮破壊兵器イイイイツ！？」

「あんですって〜〜〜！！？」

「いくら教官でもそれはないわよ！」

「……………これは驚いた」

「アストレイ訓練生、冷静すぎ！」

怒鳴り散らすなか、セーウだけは冷静に驚きティアナにツッコまれた

「本日からの訓練。それはこの　高町　なのはのデイベインバスター級の砲撃も放てるぞ。廃棄処分できて良かった　ステンシルプリンガーと戦闘し、破壊しろ。以上だ」

「ちょっとおおおお！　今、ぼそつと高町　なのはのデイベインバスター級の砲撃も放てるって言ったわよね今アアアアア！？」

「しかも廃棄処分物なんだこれ……………」

ティアナはツツコミをセーウはまたのんびりと見上げる  
スコールは後ろ手を振りながら入り口を開いていた

「しばらく俺はモニターで観させてもらう。食堂が開く三十分前までは扉をロックするが……まあ、頑張れ。<sup>グッドラック</sup>幸運を祈る」

そう言って出てしまったスコール

後に残ったのはスバル、ティアナ、セーウ、エステル、そしてステンシルブリンガーだけ

<sup>ヘウイスキン</sup>重装甲の隙間からステンシルブリンガーの眼が妖しく輝く  
そして、

「ルウウウウウウウウウウウウウウウウウウツッ!!」

「……逃げろおおおおお!!!!」

全員、異口同音して全速力で逃亡を開始した  
扉開錠まで残り約三時間弱

あつという間に昼食の時間になった  
今日の昼食のメニューは《学食特製ミートローフ》と《魚肉と野菜のポトフ》

余談ではあるが学食は必ずメイン料理であるメニューが二品と取り

放題のパンやご飯、単品メニューがあるのだ

どちらを頼むかは自由だが訓練生達はそれを決める前にある光景に眼を奪われていた

それは、

「モグモグモグモグモグモグモグモグモグモグ！」

スバル、ティアナ、セーウ、エステル物凄い食べっぷりだった

あの三時間弱の間、対抗策もないまま全力で逃げていた。無理もない

わひゃあ！ ちよつ、火を吹いてるわよこいつ！？ 危ない！

かすつてる！ かすつてるうううう！ ああ、死ぬのか……。

冷静になつてる場合！？

おかげで身体のおちこちに包帯を巻くことになってしまったスバル達  
またお腹も減ってしまったので先ほどのようになっていたのだ

「ちよつ、あいつら……。一体どれだけ食べる気なんだ！？」

「宇宙だ！ あいつらの腹に宇宙が出来てるんだ！！」

「何……………！？」「」「」

「うっさいわよそこ」

「……………すみませんした……………！！」「」「」

大して魔導師の誇りがあるわけでもない比較的スバル達と接している訓練生は全員で驚きティアナにフォーク片手に威圧されて即座に謝った

遠巻きに観ていた訓練生達はスバル達の食べっぷりに呆れたり女子訓練生はセーウの優雅に素早く食べる様子にうっとりしたりスバルの自称がんがん食べないと痩せてしまう体質を羨望と嫉妬の眼差しで睨んでいる

それから数十分後

食べ終わったスバル達は食器を片付けると食堂を出ていこうとするその時、入り口前ではったり今朝揉めた少女      ネロ・クラディウスと出会った

「あ」

「なあっ!?!」

スバル達は出会っちゃった、みたいな感じだったがネロの方は物凄く驚いていた

「どっ、どうしたのだそなたら、何があったのだ!?!」

大慌てでスバルやセーウの顔を見つめたり  
何故か焦ってる

「うむっ、イジメか?    イジメだな!?!    そうであろう!」

「あ、あの……」

「誰だ、この者達の美しい顔を汚した奴腹やつばらは!?!    我が剣の錆と変えてくれようぞ!」

「人の話、聞けえええええ!」

勝手に解釈しデバイスまで取り出す始末のネロにティアナの叫びと共に手刀を脳天にお見舞いする  
べしい、と手刀にははなかなか良い音を出すな、とセーウ

「むぎやつ!？」

「人の話は聞きなさい! これは訓練で出来た怪我よ。勝手に解釈されては困るわ!」

怒鳴るように叫ぶティアナ

ネロは納得したのかデバイスを待機形態に戻す

「なんと、そうだったのか。それはすまなかったな。今朝の件も含めて謝ろう」

「……? 何で今朝の事も謝るのよ」

「余も我が儘過ぎた、と言うことだ。なに、はじめのつもりだからそなた達は気にせずともよい」

爽やかな笑みと共に言われた言葉にスバル達は

そこまで悪い人じゃなさそう

と思ったが、

「精々、訓練のやり過ぎでその美しい顔を汚さぬようにな。余は美しい女子は好きじゃ。美しい少年はもっと好きだ。頼むぞ落ちこぼれ共よ」

訂正。 皇帝みたいで絶対負けたくない  
本気でそう思うスバル達は訓練場に戻ると

一週間後

第一訓練場

「はあああつ！」

「やあああつ！  
流槌閃！」  
りゅうついせん

戦ッ！

セーウとスバルが同時に左右から斬り掛かる  
ステンシルブリンガーは左右二つの剣を交差させ、振り下ろしを受  
け止める

「エステル、今だ！」

「ランスターさんも！」

鏑競り合いのままスバルとセーウがパートナーの名を叫ぶ  
ティアナとエステルはステンシルブリンガーの正面に立ちデバイス  
を構えていた

「シュートバレット！」



「まだんこん  
魔弾棍！」

ティアナは球体に圧縮した魔力を更に弾丸状に形成し、エステルはクローディアの先に魔力を溜め振りかぶるように構え、共に撃ち出した

撃ッ！

放たれた魔力弾はそれぞれ左右の腕に命中し破壊させた  
腕を破壊されたステンシルブリンガーは驚いたような姿を見せてから一旦後ろに下がりそしてティアナ達に向かって突撃してきた

「いくよスバル！」

「うん！ クラウディアカルマ、カートリッジ、ロード！」

「レーヴェ、こちらもカートリッジ、ロード」

ガシユン×2

スバルはクラウディアカルマを、セーウはレーヴェの薬莢ケースを共に一つずつ排出させ一時的に強化する  
そして、

「  
緋凰一閃！」

「  
双牙一閃！」

閃ッ！！

斬ッッ！！

黒き魔力を帯びた一撃と双剣の同時に振るわれた一撃がステンシルプリンガーに刻み込まれた

「ル……ルウウ……ルウウウ……ッ！」

そんな機械質な音声を最期にステンシルプリンガーは崩れ落ち、動かなくなった

「や、やった……！」

「ふう……やったわね」

「やったー……！ セーウやったわね〜」

「うん……ってうわっ、抱き着かないでエステル」

過酷な修行をクリアすることができ思い思いで喜ぶスバル達  
脇で観ていたスコールはさすがにこの結果には少なからず驚いていた

「良く……クリアしたな。さすがに驚いたぞ。まあとにかく第一課題はこれで終わりだ。今日はゆっくりして良いぞ」

「……はい！」「……」

四人は嬉しそうに返事を返す

と、そこでスコールが思い出したのようにスバルに尋ねる

「そっいえばスバル、お前の剣術の型と名はどこかで聞いたことが

あるんだが、流派はどこなんだ？」

「あー、私の剣術は全部レインさんがくれたこのペンダントの中にあつた本に書いてある流派なんですよ」

そう言つてスバルはペンダントから数冊の本を取り出した  
本の表紙を見て少なからず驚くスコール

表紙には『るろうに剣心 明治剣客浪漫譚』と書かれていた

「ほう……。また懐かしい物と出会つたものだ」

「あれ、スコール教官この本を知っているんですか？」

「ああ。子供の頃住んでいた世界で読んだものだ。ということはスバルの流派は『飛天御剣流<sup>ひてんみくおぎりゅう</sup>』か。なんというか、運命を感じるな……」

最後は呟いたので他の者には聞こえなかった

スコールもこの本を知っていたことに驚くスバルだったが流派が飛天御剣流と言われると首を振る

「私のは独学で学び私に合つた剣術にしちやいましたからもう飛天御剣流じゃありませんよ。名前は決まっています……」

「それじゃあ、さ。こつ言つのはどうかな？」

「セーウ？」

「君の名は空に浮かぶ煌めく星々<sup>スバル</sup>。蒼空<sup>そら</sup>に輝く一番星。御心のままに己の魂<sup>こころ</sup>を振るい弱き人々を救う……」

セーウは詩のように言葉を紡ぐ  
そして言う

彼女に合う名を

「  
蒼天御昂流」  
そうてんみずはりゆう

新しき剣術の名前に初めは驚くスバルだったがすぐに眼を輝かせた  
のだった

「さあ、余と踊ってもらおうか？」  
わたし

そんな言葉と共に一人の訓練生が身の丈以上の大剣を担ぐように構  
えた

重さを感じさせない身のこなしで一気に訓練用戦闘機体、パンデオ  
ンに接近すると両手で大剣  
大剣型デバイス、グノシウスを振  
るった

撃ッ！

重量を伴う一撃はいとも簡単にパンデオンを叩っ斬っていく

「散花で出来た天幕！」  
ロザ・クルトウス

花を散らすが如くすれ違いざまに魔力を込めた大剣を一閃する  
通り抜けられた二機はしばしのタイムラグの後、爆発を起こす  
と、そこで

ピー！

「そこまで！ ネロ・クラディウス、見事魔導師陸戦Aランク昇格  
試験、合格！」

終了を告げる笛を鳴らした教官が喜ばしいように結果を伝えた  
それを聞くや遠巻きに見学していた訓練生は興奮したように話し合う

「かーっ、ネロさんってやっぱカッコー！」

「だよな。訓練校ニルに入校してわずか2ヶ月でAランク昇格試験に  
受かるなんて初めてだぜ」

「うっ、L・O・V・E、I'm loveネロすわぁーん」

ある者はネロ活躍に格好良いと思い、またある者はその凄さを語つ  
たり、またまたある者はネロの格好良さに壊れネロに陶醉しファン  
クラブまで作り応援していた

ちなみにここ第四陸士訓練校の全校生徒人数は約千人に上るがその  
半数以上がファンクラブに入っている

そのメンバーは誰しもが思う

彼女ネロさんはいつか必ず英雄として語られるだろう  
と

そしてそう思うのは何も訓練生だけではない

「いやはや、ネロ君は大したものだ」

「さよう。彼女はこの第四陸士訓練校始まって以来の秀才だ。いずれは名だたる魔導師になってくれるだろう」

「うむ。しかし……スコール教官には困ったものだ。我が校誇りのネロ君を無視し、あろうことかあの落ちこぼれ共を第一訓練場で率先して鍛えていると言っではないか」

「“ライオンハート”なんて呼ばれてからではないがあいつの暴走っぷりには付いていけん。何故学長も臨時にあいつを教官にしたのだろう」

「さあ。どうせ《SEED》生の我が儘に付き合っただろう」

「それもそうだな。そんな優等生の下で育った魔導師の末路が楽しみだ！」

「まったくだ！ はははははははははは！」

教官もそうなのだ

自分達の下で育成されいつか英雄になってくれるだろう彼女に過度な期待をしている

一方、当のネロはと言うと、そこまで誇りを持っているわけではなかった

ネロの家系      クラディウス家は由緒正しき魔導師の家柄で昔からネロは父、セネカ・クラディウスから『魔法を誇りにしろ』と言われてきた。だが彼女は幼少の頃より何かに縛られるのが大嫌いだ。だからネロは表面上は言われたように動き隠れて独学で様々な事を覚えた

もつともネロが得意としたのが剣術と芸術だ  
故にネロはクラディウス家では珍しい剣型デバイスを使用し美にう  
るさいのだ

閑話休題

とにかくネロは内心でため息を吐きながらその場を後にしたのだった  
最後に言葉を残して

「余は近い未来、至高の芸術から至宝の芸術となろう。我が  
活躍しかと観ておくがよい」

ちなみにネロの口調は自前でこうである  
だが観客である訓練生達はそれだけで、

「「「わあああああああっ！！」「」「」

奮起して叫ぶのだった

所変わって第一訓練場  
スバル達五人は先ほどのネロの魔導師Aランク昇格試験の様子をモ  
ニターで傍観していた

「……なんか気に入らないわね」

早めの昼食を食べながらエステルは不満気に漏らした

今日の昼食は《ビーンスープとパン》と《ベーコンとレタスのクラブサンド》だったが汁物は人数分入れ物が無いと持ち運びが出来なかったのでクラブサンドだけ

「……？　どうかしたエステル？」

セーウが聞き返す

「なーんであの皇帝女はあそこまでちゃほやされているのにあたし達はあんな言われようなのよ！　あの教官、どうせ魔法しか出来ないポンコツでしょ？」

「エステル……、それ絶対に皆の前で言わないでね？　一般魔導師に対する侮辱だからそれ」

エステル一言に呆れたようにセーウが突っ込んだ

ティアナは横眼でそれを見た後、相棒を見る

相棒であるスバルもまた、気持ちの良いくらいクラブサンドを平らげていた

誰も疑問に思わなかった様なのでティアナは静かにクラブサンドを食べているスクールに質問を投げ掛ける

「あのスクール教官、ちょっと質問が」

「何だ？　がながん食べてないと痩せてしまう体質についてだったら俺は知らないぞ」

「違います！　って言うかそんな体質、ほ、欲しいとは思いますが……今は関係ありません！」



ティアナはスコールのクールなボケに突っ込んだ後、一息ついてからもう一度訊ねる

「あの 《SEED》 生、と言うのは何なんですか？」

確かに聞きたいことだった

と、セーウは思う

自分が知っている訓練校、部隊を思い返しても《SEED》生、なんて聞いたことがない

スコールもああと返事を返し四人にしっかりと向き直った

「知らない奴は多いだろうな。《SEED》と言うのは二十年前に設立された魔導師育成及び強化専門の訓練校の総称だ。普通の訓練校よりも百倍厳しい所だが卒業生は皆、Sランクに到達することが出来る所」

初めからSランクに到達する事が出来る事に驚きだすスバル達

「とは言っても練習が余りにも厳しすぎて大半の訓練生は途中で退学していったがな」

「あの、今はその訓練校は……？」

「無い。学長の話によれば十年間だけの開校だったらしくて、俺の代が卒業して閉校した」

ティアナの質問にスコールは即答する  
その答えにティアナは残念そうに「そうですか」と答え黙ってしまった

そこへセーウが新たに質問する

「それじゃあスコール教官の所属する第444魔導戦士部門ソルジャーについて聞いても良いですか？」

「ああ、そうだな。構わん」

スコールはあっさりと承諾し第444魔導戦士部門ソルジャーについて話始めた

「俺が所属する、というか創った第444魔導戦士部門ソルジャーは一言で言うてしまえばバケモノの巣窟だな」

「バケモノ　？」

あり得ない単語に思わず聞き返してしまうセーウ

「ああ。正確にはバケモノになる寸前の者達が所属する再凶アルテミス・タスクフォースの部隊」

スコールははつきりと告げると腕を持ち上げ何かを出現させた  
それは魔力とも違う蒼い闘気のようなもの

「第444魔導戦士部門ソルジャーに所属した者は例外なくまずその身に『暁魔』うまと言うモノを浴びなければならない。暁魔は適量を浴びれば身体能力、魔力を大幅に上げることが出来る一種の薬剤みたいなものだ。そしてその力を使い、管理局から出された任務を行ったり自主的に任務をこなしていく。どれもこれもAAAランク以上だから面倒くさいがそれを利用する事が出来る」

「利用する……？」

「任務の際に発見したロストログアを独自に回収して、世の為になるのなら管理局に引き渡さずに保管またはこちらだけで使用し、害を及ぼすものならばその場で破壊する」

「破壊！？ 何でそんな事するのよ？」

「お前達は知らないだろうが管理局には裏の面もあると言うことだ。人道から外れた人体実験を極秘に行ったり不必要な情報を見た局員を殺しそれを世間には犯罪者に殺されたと公表したりとな」

スコールの言葉にスバルとティアナが息を呑む

誰も知らないが二人の共通点は過去に家族が殉職している事だった  
スバルは母親を  
ティアナは兄を

「そんな管理局にロストログアなんかを渡したらロクな事に使われかねないからな。ちょうど管理局は俺達を忌み嫌ってるから俺達のやり方に口出せず高をくくってるから好都合だ」

「つまり利用されるのを利用すると？」

「そうだ」

管理局の中にも色々な部隊が存在してるんだ、と思わず感じてしま  
うスバル達  
と、その時だった

「たのも」

変な声と共に誰かが訓練場に入ってきた

スバル達が振り向くとそこには笑顔でこちらに歩いてくるネロがいた

「なっ……！？」

さすがにこれには驚き出す

だがネロはのんびりとこちらにやって来た。手には袋が握られている

「すまぬな、魔導師試験が昼までかかってしまつて食堂で食べられなかったのだ。悪いがここで食べさせてくれ」

「う、うん……」

「つてえ、スバル！ 思わず頷いちゃダメよ！」

驚いたスバルは思わず頷いてしまいエステルから突っ込まれた

「大体あんたもあんたよネロ・クラディウス！ 何であたし達の所で食べるのよ？ いつも連れてくる訓練生と食べれば良いじゃない！？」

「……あれは余がクラディウス家の次期当主だからゴマをすりに来ている愚か者達に過ぎん。まったく……魔導師の誇り誇りと謳うのならばもう少しマシな者はおらんのか」

ネロはぶつぶつ言いながらクラブサンドを口に放り込んでいく

「……………あんたってあたし達と逆の存在なのに大変なのね」

エステルが苦勞しているような口調のネロを見て同情するように呟く

「まったくだ。余も人の前だと魔力だけを誇らなければならんからな……、まあ、それは次元界から永久追放しておくとして、そなたは何をしておったのだ？」

優雅にばくくクラブサンドを口に放り込むネロは尋ねる

それに答えたのはスコールだった

「お前の魔導師試験を見てた。今からは……そうだな、技の習得や交換をしてみらおう」

「……技の習得や交換？」

「そうだ。新しい技はあるだけマシだからな。無いよりは良い。まあ、まずスバルはこれでも観ておけ」

そう言つてスコールが渡したのはとあるDVD

それはとある世界でかなり有名な映画祭にも出された一本の映画

「その中に出てくる技をしっかりと覚えて活用しろ」

「これパクリでしょう！？ 明らかに無理がありますよ！」

「何を言っている。スバルは既に飛天御剣流をパクリ蒼天御昂流として使つてゐるではないか。それと何ら変わらん」

「……確かにそうだ」

スバルは確かにそうだと思い、渋々DVDを受け取った

「セーウはスバルから『るろくに剣心』を借りて四乃森 蒼紫の技を覚える。あの小太刀二刀流はお前によく合いそうだからな」

「教官、貴方一体何を言ってるの！？ そんなのでいいの！？」

「ええ、分かりました。スバル、後で見せてくれるかい？」

「うん、良いよ」

「こつちもこつちで対応しちゃってるし！」

思わずと言ったようにティアナがスバルとスコールとセーウの言動にツツコンでしまった

「ティアナはまず簡単に足腰を鍛えて50mを6秒台で走れるようになるか。ガンナーでも健脚は必要だ」

「あ、はい。……って、偉く私の訓練メニューは楽なんですね」

「ちなみにティアナの目標は火傷ガンナーみたいに空を飛ぶことだ」

「それ、健脚関係ないわよねー！ー！？」

自分の訓練内容にも叫びながらツツコンでしまうティアナ半ば諦めたのか突っ込める所はツツコム事に決めたらしい

「最後にエステルだが……とにかく振つとけ」

「テーゼ訓練生だけとてつもなくアツバウト！」

「分かったわ。とにかく<sup>ピー</sup>を振れば良いのね！」

「放送禁止用語の前に女子が口にして良いわけない大胆かつとんでもない事を口にしたわこの人……」

そんなボケ突っ込みの嵐が第1訓練場に広がるなか、一人黙々とクラブサンドを頬張りながらネロは笑いを堪えていたのだった

#### 40号室

あの後、スコールが「とにかく新しい技、または誰かの技を一つ、使えるようにする事。それまで練習は休み、または自習だ」と宣言して訓練が終わった

スバル達は部屋に戻ると言われたことを実践した

スバルは借りたDVDを見て、セーウは『るろくに剣心』の四乃森蒼紫が出てくる巻を読んで、ティアナはエステルと共に外で走っていた

「それにしても技はともかく凄く格好良いアニメだったなあ」

DVDを見終えたスバルはそんな感想を持つ

主人公の金髪兵士が使う合体剣や敵である銀髪天使の正宗は自分には使えないかも知れないがとても参考になったのだ

スバルはこれから色んなアニメやゲームから技を取り入れることに決めた  
もうパクリなんて何のそのだ

「セーウはどう？ 何か参考になった？」

「あ……うん。色々あったけど『陰陽撥止』おんみょうはつしや『回転剣舞六連』なら使えそうかな？ 『陰陽撥止』は剣自身を使わなくても魔力で精製した魔力剣でも十分補えるみたいだし」

「そっか、それは良かった」

「うん、ありがとうスバル。……そうだ、お礼に僕からも一つ、技を教えてあげるよ」

「えっ、何々？」

そう言っただけでセーウは技の説明を始めた

証翼しじよく連

互いに引き合う魔力剣を両手に精製しそれを相手に向かって投擲する  
何回も投げた後、隙を突いて斬り抜けた後、上からの魔力剣で串刺しにする魔法剣術

弾かれても魔力剣は空中に停滞し続け自分の合図があるまで相手を  
中心に回り続けるので初めて見せた相手を驚かせる事が出来る

また見せた事がある相手でも意表を突いたり牽制の為に使う事が可能である



尚、名前にあるには魔力剣を精製し投擲した回数によって変わる  
四回からは静連と呼ぶ

「それって難しい、かな？」

「うーん……人それぞれだから分からないけど、僕は代行詠唱ショートカットを加えて使うから比較的楽だね」

「代行詠唱？」  
ショートカット

「つまりは……こう言うこと」

セーウは椅子に座ったまま両手を交差するように、突き出すように構え、その代行詠唱ショートカットなる詠唱を唱え始めた

わがけん いのちの あかしなり  
我魂 命ヲ賭シテ完遂サレシ者

わがけん あかしのみぎ てにいちする  
我兄 無敵ヲ超工無敗ナリ

わがけん あかしのひだ りてにいちする  
我姉 全テヲ癒ス我ガ女神

わがけん これをほ まれにしたく  
我心 二人ニ認メラレタイガ為ニ

わがけん とともにゆ めをいだく  
我剣 共ニ命を賭ケル者ナリ

一詠唱唱える毎に両手に月光色の魔力剣が精製された  
それを見てスバルは驚き出す

「と、まあ、こんな感じかな？ 魔力を何かにする際、特定の言葉なら瞬時に特定の形に産み出せる様にする。これが代行詠唱<sup>ショートカット</sup>」

「す……凄いな。私にも出来るかな？」

「要は頭の切り替え、かな？ ほら、例えば八神はやて一尉みたいな空間殲滅魔法みたいなモノは決まって詠唱が必要じゃないか。それと同じってこと」

「つまり……さっきの詩のような言葉が詠唱？」

「そうだね。もしスバルが覚えるのに使うなら使っても良いよ」

「ホント？ ありがとセーウ」

スバルは笑顔でお礼を言う

と、ちょうどそこへ扉が開く音が聞こえた

二人が振り向くと入ってきたのはティアナとエステル、そしてスコールだった

「エステル、ランスターさん、おかえり。 どうしましたかス

コール教官？」

「ただいま。 スコール教官とはそこでばったりと」

「邪魔をする。 面倒なモノを報告に来た」

スコールはため息を吐きながら面倒なモノを説明し始めた

「他の教官から皮肉気にこちらを馬鹿にしたんでな、二ヶ月後、スバル・ティアナペアはネ口のペアと、セーウ・エステルペアは総合順位四位のペアとそれぞれ模擬戦をすることになった」

「ええーーーーー!？」

「あんですって~~~~~!」

余りの唐突さに思わず叫んでしまったスバルとエステルティアナとセーウも落ち着きながらも驚いていた

「と言うわけで二ヶ月の間、色々と鍛えるぞ……と言いたいところだがこの二ヶ月だけは俺も部隊の事やら何やらでしなくてはいけないことが山積みなんだ。そこで」

そしてスコールはとんでもない事を命令したのだった

「この二ヶ月、お前達だけで切り抜けてみる。それを期末試験にする」

## 追憶ノ式々修業と試練（後書き）

という訳で、四人だけで模擬戦を切り抜けることになりました  
手を抜いてるんじゃないのか、という感想を持つ方もいるかもしれ  
ませんが、そんな事は一切ありません

今回はほとんど会話で戦闘シーンは一部だけです。これは次回も同  
じだと予定しております

模擬戦前にやはり、原作の話も入れておきたいので

恐らく模擬戦は次々回かその次のどちらかですが、前書きでも書いた通りすっかりゲームに意識が向いており、全然執筆が進んでいない状況。来月、ちゃんと更新できるか正直自信がありませんね  
ですが、それでも頑張ってみますので、読者の皆様は気長に待っていてください

次回は上にも書きましたが、原作にあった話しを中心に進めたいと思います。お楽しみに

それでは今宵の私の会話は一先ず、これまで

次話でお会いしましょう

## 追憶ノ参々偽・落ちこぼれ達の休日（前書き）

前回は戦闘から離れていましたが、今回も同じ感じです

基本、原作を題材にして書きました

ここでやつと、登場人物紹介にて書いた事を実践できそうです

え？ 書いた事とは？

それは本編と人物紹介を比べてみて

ください（オイ

とりあえず、戦闘は脇に置いて休憩。次回からは連戦となりますので  
それでは、どうぞっ

## 追憶ノ参々偽・落ちこぼれ達の休日

スコールから模擬戦の予定を聞いた次の日

スバル達四人は大きな掲示板の前にいた

スバル達だけではない。訓練生のほとんどが掲示板の前に集まっていた

ちなみにスコールは既に訓練校を離れ、用事を済ませに行った

「これが本日までの訓練成果発表だ。教官判断の総合成績だが各自参考にするように」

その場にいた教官の一人が指を指しながら説明する

「ふえー、こんなものがあるんだ」

「当たり前よ。訓練校なんだから他ペアと競争ぐらいするわ」

驚くスバルに淡々とティアナは答える

「あたしたちは何位なんだろ」

「ちょっと距離が離れすぎているからね、少し待つてからのほうが良いよ」

「あ、待つて。私見えるよ、ここからでも」

「なら見てくれるかいスバル」

「うん、えーっとね……」

スバルはやや爪先で立ちながら掲示板に映っている自分達の名前を探した

「アストレイ& a m p ; テーゼ、総合二位！ ナカジマ& a m p ; ランスター、三位！」

「……え……？」

さすがに三人とも驚きの声を上げ自分達でも確認した  
掲示板には確かに二位にセーウとエステルの名前が、三位にスバルとティアナの名前が表示されていた

「……………。本当だ」

「ははは……。スコール教官も凄いことするな」

「やったじゃない！」

驚くティアナとセーウに喜びだすエステル  
だが三人とも顔は笑っていた

「さて……、確認もしたし部屋に戻ろうか？」

「うん」

セーウが促しスバルが頷き部屋に戻る  
その時だった

「これさあ、イカサマしたんじゃないね二位と三位の連中？」

訓練生の集まりの中からポツリと呟かれた

それはスバル達の足を止めるのにも、周りの起爆装置になるにも最高最悪の言葉だった

「そう言えば……、あいつら最近訓練に出てなくね？　なのに何で上位に入ってたんだよ」

「そっぴやそっぴや。　　っか、知ってるか？　ティアナ・ランスター、あいつ士官学校も空隊も落ちてんだとよ」

「ああ、オレも聞いたことあるぜ。相方はコネ入局の陸士士官のお嬢だとよ。格下の陸士部隊ならトップ狙えると思ってんじゃない？　恥ずかしくねーのかね」

「それなら同室の女だって『元』管理局勤務の父親がいたんじゃないのかったつけ。しかも使い物にならなかった」

「言えてるな、はははは！」

糞汚い言葉に思わずティアナとエステルは拳を握って探そうとする  
だがこの場だけでも百、二百いるのだ。見つけられるわけない

「ランスターさん、エステル。行こう」

「……今の聞こえたでしょ？」

「聞こえなかった。さ、行こう」



「エステルも」

スバルとセーウは静かに止め強引に二人を連れていこうとする  
それを見て苛ついた訓練生は更にスバル達に聞こえるように喋り始  
めた

彼女達にとって我慢できない禁句を

「つーかさ、ぶっちゃけレイン・アスハって英雄英雄って持て囃さ  
れてるけど実際どうなんだろうな？」

「あつ、オレも気になっていた。英雄とか言いながら魔法なんて滅  
多に使わないらしいな。そんなヤツが英雄になるなって話だ。英雄  
ってのはやっぱり魔法を使いこなし魔法のために生きたヤツにこそ与  
えられ称号じゃん？ 最悪だなレイン・アスハは」

「レイン・アスハは英雄よりも罪人の方が似合ってるぜ」

ピタツと足を止めるスバルとセーウ

我慢しなければいけない。あれは自分達に仕掛けている安い挑発だ  
だが頭では分かっているけど心だけは、想いだけは許せなかった

何にも知らないくせに！

レインさんの事は私だってあまり知らないけどそれでも！

自分の危険を顧みず困っている人を救ってくれたあの人は間  
違いなく英雄だ！！

スバルはふざけた事を吐かした奴らに叫ぶのを必死で堪え心の中で

叫んだ  
その時だった

「何を寝ぼけた事を言っておるのだ、この戯<sup>たわ</sup>け者め！」

突然、怒鳴り声がその場を支配した

全員　スバルもティアナもセーウもエステルも他訓練生も  
が振り向くとそこには青い導師服を着て狐耳をピヨコンと一尾を  
生やしたエキゾチックな少女を伴った金髪緑眼の少女　ネロ・ク  
ラディウスが怒りの形相で立っていた  
ネロはつかつかと喋っていた訓練生の下に歩いていく

「ねっ、ネロさ……」

「貴様は先ほど何と言った？　レイン・アスハは英雄よりも罪人<sup>シン・ウラノ</sup>の  
方が似合ってるだど！？　馬鹿を言うのではないっつー！！」

ネロは訓練生が何かを言う前に眼の前で怒鳴り付ける  
眼の前で怒鳴り付けられた訓練生は眼を白黒させている

「英雄とは常人では不可能とされる事件や問題を解決に導いた者に  
贈られるせめてもの労りの言葉。同時に起きた事件や問題をけ決し  
て忘れ無いように人々に焼き付けるための謂わば生ける証人なのだ  
！　それを軽々しくも罪人の方が似合っていると言うなど……魔導  
師として失格だっ！」

正論に思わず何も言えなくなる訓練生  
その際にネロはスバル達に道<sup>パス</sup>を繋いで念話で話しかけてきた

「（そなたらはしばらく外に出ておれ。この馬鹿共は余が叱<sup>わたし</sup>っておく）」

「（で、でも……）」

「（あー、この一筋マスターの言うことは聞いておくもんですよ。この人、そういうことだけはお上手ですから）」

新たに念話に割り込んできたのはネロと共にいた露出の高い導師服を着ている狐耳の少女だった

「（後で調教が必要だな駄狐が。ただ、この駄狐の言葉は少なからず正しいからな。ほれ、早く外に行け）」

「（あ……ありがとうネロさん）」

スバル達はネロにお礼をすると出ていった  
誰かがそれを見つけるが、

「さ、長く続ける気はないがそなたらの魔導師としての誇りと話をしようか？」

ネロが許すはずがなかった

中庭

スバル達はここまでやって来ていた

「……………どうして、言い返さないのよ？」

スバルから飲み物を渡されながらティアナは怒りを隠そうともせず  
に問い掛ける

「間違った事を言われた。ならそれは正さなきや。正しいって証明  
して見せ付けなくちゃダメじゃない」

「そうよ、それなのにどうしてセーウとスバルは我慢できるのよ？」

ティアナとエステルが怨嗟えんさを含みながら訊ねる  
それにセーウは素直に答えた

「ああ言うのは軽口の類いに入る憎まれ口程度だからね。正しい間  
違いつて決め付けるわけにはいかないんだよ」

「でも…………セーウだってレインさんの事言われた時…………」

「うん、あれには反省してる。我ながら安い挑発に引っ掛かつちや  
ったなって。スバルもそうだよな？」

「うん…………そうだね。私もランスターさんやエステルの事は言えな  
い。……………だけど、あそこで手を出したらあの人達の思うつぼなんだ  
よ。それに…………」

スバルは一区切りつけるとティアナの眼を見て訊ねた

訊いてみたい事を

「ランスターさん、本当は士官学校や空隊に行きたくって……ここなら楽勝と思つて入ったんじゃないよね？」

「ッ！ ……なんであんなにそんな事……」

「教えて？ 私とランスターさんは仮とはいえパートナーなんだから」

「……………」

黙るティアナ

ジツと待ち続けるスバル

観念したのかティアナはため息を吐き遠くを見るような眼で答えた

「……落第は事実よ。士官学校や空隊、両方とも落ちたわ。だけど！」

すぐに視線を自分を見ているスバルに移して真剣に語る

「今いる場所を卑下すほど腐ってないわよ。いつかは空に上がる。けど今は誇りを持ってここにいる。まずは一流の陸戦魔導師になる。ここを主席で卒業して陸戦Aランクまで駆け上がって……最終的には空隊に行く。それが今の私の目標よ！」

グツと拳を握り締めながら宣言するティアナにスバルは優しく笑うそれを見ていたエステルも少しだが怒りが収まったようだ

「（大丈夫。君のお父さんは凄く格好良かったよ。カシウスさんは

強くて優秀だった)」

「（セーウ……。うん、そうよね。ごめん、頭に血が昇ってたわ）」

「（いいよ、気にしないで。誰だって身内が馬鹿にされれば怒るさ）」

エステルも自分の怒りを納めて肩の力を抜いた  
それを見て安心するセーウ

「ふむ、ここにいたか。探したぞ」

と、そこへネロがやって来た。後ろには先ほどのように露出強（露出度が高い、多い人に使う言葉。決して誤字ではありません）な導師服を着た狐耳少女が付いて来ていた

「あ、ネロさん」

「説教は終わったのかい？」

スバルとセーウがいち早く気付き声をかける

「まあ。余に……というよりクラディウス家に嫌われたくないのか皆<sup>みな</sup>必死に謝っておったわ。……やれやれ、これではそなたらと戦っても意味はないの」

「？ どーゆーことよ」

頭に手を当てながら振るネロを見てどうしてか理由を訊ねるエステル  
それに答えたのは狐耳の少女だった

「なんでも、貴女方と私とマスターの模擬戦、仕組まれているようですよ」

「ど……どういうことよ!? あと、あんた誰？」

「その場に私はいませんでしたからマスターからの又聞きですが、今回の模擬戦で自分勝手に鍛練している貴女方四人とイケメンのスコールさんを模擬戦、と言う名の制裁でボッコボコにして訓練校から追い出そうと画策しているようですよ。ちなみに私は頭ん中までSTRなマスターの使い魔、タマモと申します。以後、よろしく願います」

自分の事をタマモと呼んだ狐耳の少女の理由にスバル達は啞然としたまさか教官達がそんな事を考えていたなんて思いもよらなかったのだ。どうやら教官達にとってそなたらは眼の上のたんこぶらしいのだ」

「な、何よそれ……!」

「そんな……」

ティアナとスバルも茫然と呟いた  
ただ一人、セーウは冷静でいた

「ネロさん。貴女は受けたんですね? ……それを」

「!?!」

冷静な質問にスバル達三人もそうだと言わんばかりにネロを見つめる  
四人の眼差しにネロは臆する事なく質問に答えた

「うむ、受けた」

「ッ、何でよ!? あんたも私達が邪魔なの!？」

ティアナが吠えるように怒鳴る

「馬鹿を申せ。余だつて様々なツテから何とかしようとしたわ。…  
…しかし、どうする事も出来なかった。拳げ句、最悪な奴腹やつはぐはそんな事せずそなたらを退校させるべきだと言つたわ。ならば、まだ希望が残っている選択肢を取る他、なかったのだ」

「……」

四人はネロが自分達のために動いてくれたと知り黙るしかなかった

ネロはネロなりにどうにかスバル達を追い出そうとするのを防ごうとしたが所詮訓練生  
どうする事も出来なかったのだ

「まったくイケメンじゃない殿方なにゆえつて何故あも頭が固いんでしょ  
うかねえ、あの無職無能存在無価値どもは」  
アイデンティティークライシス

タマモも頭を振りながら頭にきている事を言っておく

「……悪かつたわ……」



「いや、ティアナの怒りはもつともだ。余はそなたら四人から怒りを受ける理由がある」

「……………」

あまりの潔さに思わず閉口してしまうティアナ

ネロは自ら魔導師の誇りは他を騙すための建前だと以前話したが、彼女自身の誇りだけは嘘偽りなく彼女の強さだった

「しかし、そうだな……………うむ……………」

「? どうしたのよ」

「いや、な、こう……………今の余の気持ちを言葉に表せないのだ。何と  
言えば言いかのう……………」

さつきまで凜とした格好良さがあったのに今はこめかみに指をぐりぐり押し付け何かを言おうと考えていた  
それを見たタマモはくすくすと笑うと、

「マスターってば素直じゃありませんねえ。お友達になりたいって  
言えばいいじゃないですか」

「……………はい?」

「う、うむ……………それはそうなのだが……………むむむ……………」

あまりに単純な悩みに呆れてしまうスバル達  
ネロは悩んだ末、とにかく言ってみる事にした

「えつとな……余はこの世に生を受けてから十数年経つのだが友人と呼べる者がおらんのだ。ほら、余に集まる輩は皆、出世のためやら何やらの己の欲しか持ち合わせておらんなわけ者なのだ。しかし、そなたらは違う。出逢った時から余を特別扱いせず対等に話をしてくれた。余にはそれが何より嬉しかったのだ」

「あの時はあんたが暴君丸だったからでしょうが」

「ふふ、言えておるの。だがそれも出逢いの理由としてはまた良かるう？」

「まあ、確かにそうだけどさ……」

彼女自身気付いていないかもしれないがネロは今、穏やかな笑顔を見せていた

エステルはため息を吐くとスバル、ティアナ、セーウを順番に見た全員を見渡すと同時にプツと吹き出し四人は笑い出した  
それに慌てたのはもちろんネロ

「な、なぜ笑う！？ と、とにかく余は言ったからな！」

顔を赤く染めギリギリと握った拳をプルプル震わせながらネロは叫び出す

「うわぁお マスターの恥ずかしがるお顔、なんてレアなんですよ もったいないから記録してもよろしいですかぁ？」

「うむ、却下だ。ここでその思考と共に我が剣のサビと消えるか、駄狐よ？」

「冗談ですよ冗談。まったく、冗談が通じないなんてやっぱりマスターはのー筋マスターですねえ」

また彼女達の口論が始まりそうだったのでスバルは出鼻を取った

「あはは、どうどう」

「それは余をいやしい雌犬と思っていると決めていいのかスバル？」

「そんな事ないよ。だってネロは暴君だもん」

「……………あ」

名前を呼び捨てにされた事に気付いたネロは思わず頬を緩ませた友人になった証拠だった  
ネロは精一杯胸を逸らす

「うむ、余こそ暴君よりも恐れられる……………予定の至高の絶対皇帝、ネロ・クラディウスである！」

「予定なのかい！」

エステルの渾身のツツコミに一同、一瞬静かになったがすぐに六人で笑い始めた

そこには年相応の笑いを浮かべる少年少女しかいなかった

「ははは……………いや、こんなにも楽しく笑ったのはいつ以来であろう」

笑いの余韻を残しながらネロは笑うのを止める

「別にいつ以来でも良いじゃない。今、笑えればそれで良いと思うわよあたしは」

「そうだな……。うむ、これで心置きなくそなたらと対峙できよう」

「そっか、ネロの相手は私とランスターさんだったね」

スバルは今、思い出したように言い出す

「うむ。余は負ける気など一ミクロンも持ち合わせておらぬが、そなたらと戦うことを楽しみにしていよう。……ではな」

そう言つてネロは立ち去つて行つた。タマモは「それでは二ヶ月後にまたお会いしましょう」と言つて付いていった  
後に残つたのはスバル達四人

「それじゃあ僕達も戻ろうか？」

「そうね」

彼らも自分達の部屋に戻つていく  
新たな友人が出来たことに喜びながら……

時はやや進み一週間後

スバル達は今現在ミッドチルダ東部12区内、パークロードにいた何故、こんな所にいるのかと言うとスバルが久しぶりに姉のギンガと会う約束を取り付けており、ぜひティアナ達を会わせたいと思っていたので我が儘属性を発動させ四人で来ていたのだ

なお、訓練については、週末で訓練場の定期整備をするためお休みなのだ

これならお出かけしてもいちいち教官や訓練生にお小言を言われなくてすむ

「ホントッ、あんたの我儘な所は見習うべきだって思っわ」

「褒められた」

「褒めてないわよっ！」

そうこうしている間に約束の集合場所に着いた。集合時間もぴったりだ

スバルが辺りを見回して探していると、

「スバル！」

名前を呼ばれた

まるで犬のようにぴよこんと振り向くスバル

視線の先には濃い青の色の長髪をストレートで伸ばした少女が手を振っていた

彼女こそスバルの姉であるギンガ・ナカジマだ

「ギン姉」

スバルはトッテッタツの要領でギンガに近づくと腕をパシッと掴んだ

「スバル」

くるくる回り始める姉妹

それが終わるとピシパシ、スバルが殴りギンガが受け止める

あまりにもマイペースな二人にティアナ達三人はポカンと呆けていた

「あ、そだ、ギン姉。こちら右からランスターさんにエステルにセーウ」

「ど、どうも……」

「こ、今日は」

「はじめまして」

「こちらこそはじめまして。スバルがいつもお世話になってます」

あまりのマイペースっぷりにあの冷静沈着なセーウでさえ呆れ返っていた

スバルとエステルと一緒にアイスを買っている間、ギンガ、ティアナ、セーウはベンチで話をしていた

「そう、スバルは無事にやっているのね」

「ええ、訓練校でも最年少組ですが個人成績なら上位に入っていると思います」

スバルの事を訊いてきたギンガにセーウは当たり障りのない程度を話す

さすがに二ヶ月後の模擬戦を言うわけにはいかなかったがそれでもギンガは安心した様子を見せる

「二人とも、ご家族は……？」

「あ、ええと……私、一人です。両親は産まれてすぐに、私を育ててくれた兄も三年前……」

「僕は兄さんと、兄さんと結婚予定だった姉みたいな人がいましたけど三年ほど前に亡くなり、今はエステルのお母様のご厚意で厄介になっっています」

暗い過去にギンガは「ごめんなさい」と謝る

ティアナとセーウは苦笑しながら「お気になさらず」と返した

「……スバルに聞いているかな。あの子、事故に巻き込まれているんだ」

「あの事故？」

忘れてしまっているティアナにセーウが言った

「北部にある臨海第8空港火災の事ですね」

「あ、聞いているのね。実はあれに私も巻き込まれちゃったの」

「え……？」

「私は早くにフェイト・テストロッサ執務官に助け出されたんだけどあの子はかなり奥の方で独りぼっちでね。かなり絶望的な状況で……」

そこでふと、ティアナは思い出した

この事故の発生したのは今年の四月だ

「前から思っていたんですけどそれって今年の四月の事ですよね？  
それからたった一ヶ月で訓練校に……？」

「うん、怪我は軽い火傷ぐらいだったからね」

「魔法学校とかには行っていないんですか？」

「うん、普通校」

「魔法歴、一ヶ月未満……」

「ははは……道理で飲み込みが早いと……」

あまりにも凄い転身ぶりに呆れと苦笑いしか出てこないティアナとセーウ

さらにセーウはそこでスバルの剣術の才能にも気付いた  
一ヶ月、といってもそこまで日数があるわけではない



特に何かを修行したりすると足りないと感じるほど  
なのにも関わらずスバルは一ヶ月であそこまで蒼天御昂流そつてんみずはりゅうを使いこ  
なしていたのだ

これには何年も修行してきたセーウも驚かされたのだった

「てか、凄いですね、その転身ぶり」

そんな思考をしている間にティアナはギンガと話していた

「ん　　　　　というか出会っちゃったの」

「出会った……ああ、“黒き剣聖”レイン・アスハですね」

「そう。　　あの子、レインさんに助けられてから表情が変わっ  
たの。凄く輝いてた……」

今でも思い出すのか眼を瞑りながら言うギンガ  
そこでハツとしながら謝る

「ごめんなさい、こつちの話ばかりで」

「いえ」

「あの子、あまりメールとかしないからランスターさんやセーウ君  
の事も知りたいな」

「（つーか、この姉妹、揃って眼を見て話すのよね、やりづら）…  
…構いませんけど別に普通ですよ。アストレイ訓練生みたいに相手  
を測れませんし、テーゼ訓練生みたいに色んな距離からサポートで  
きるわけでもありませんし……精々、サポート用に幻術系を練習し

てますけど……」

途端に眼をきらきらさせてティアナに詰め寄るギンガ  
まるで子供みたいだ

「幻術系！？ 珍しい！ 渋い！ どんなの練習してるの？」

「え、いや、あの、基礎的なところ……」

「なにかここでできるのある？」

「え、ええと……」

「近代ベルカ式は幻術系そうちほとんどないから羨ましいな」

姉妹って似るって言うわね……

あまりにも問いかけるギンガに詰め寄られながらティアナはそんな  
事を考えていたのだった

その後、ナカジマ姉妹のマイペースっぷりに振り回されながらも夕  
方フルまでで付き合うティアナ達だった

二ヶ月後

とうとうその日はやってきた

スバル達はこの日のために出来る限りの事はした

それでもわずか二ヶ月でAランクを取ったネロに届くかは分からない。だが諦める気はなかった

「いよいよね……」

エステルはやや緊張した様子で訓練場を見ていた  
訓練場には既に多くの訓練生が観客として集まり、入らない者もモニター越しに今回の模擬戦を傍観していた

「大丈夫だよエステル。僕らは僕らの实力を見せれば良いんだ。きっちり締めて度肝を抜かせよう」

「セーウ……モチのロンよっ！」

セーウの励ましにエステルは途端に笑顔になる  
一方スバルとティアナは、

「いい？ コンビでいる間は私の足、引っ張るような真似は許さないから。良いわねスバル？」

「あ……うん！ ティアア！」

「……ッ！？」

スバルの発言に思いきりビクンと肩を跳ね上がらせると瞬時に掴み掛かった

「ちょ……だから呼ぶなって言ってるでしょ！」

「だってティアも私を名前で読んでるでしょ？」

「私にあんたと友達でも仲良しでもないっ！ 友達はネロだけよ！  
ギンガさんと会っちゃったからなんとなくナカジマって呼びづら  
くなっただけよ！」

「でも今はコンビだよ」

「ッ！」

また肩を跳ね上がらせる。顔も赤くなっていた

「だから呼ばせて？                      仲間としての呼び方で」

あまりにも堂々とした言葉にティアナは顔を俯かせると乱暴に手を  
離れた

「もー……何でも好きにすりゃいいわよ！ どうせあんたはいつも  
通り我が儘で押し通すんでしょ！？」

「それじゃああたしも呼ばせてもらいましょ」

「じゃあ僕も」

「って、あんた達もかつ！」

あははと笑いながら言うエステルとセーウにティアナはまた怒鳴る  
だけど軽くスルーされるのがオチだ

「良いじゃない、あたしだって仲間なんだから。……あ、前から言  
ってるけどあたしも名前で呼んでね」

「一人だけ外れは寂しいからね。僕も便乗させてもらっよ」

「あんた達……」

拳を力強く握り締め、ふるふると身体を震わせているティアナだったがもう知らんばかりに背中を見せた

「もうっ！ 好きにしなさいよエステルもセーウもっ！ 何で私の周りにはツツコミ役がないのよ……」

「あゝ、ティアー怒らないで」

「うっさいっ！！」

ティアナはどしどしとネロが待つ訓練場に歩いていくスバル、エステル、セーウは待つてよゝとか何とか言いながらティアナを追いかけるのだった

これから待ち受けるは初めての壁。それも特大の壁だが結果がどうなるうと彼らは歩んで行くだろう  
今みたいに一歩ずつ

だからこそ廻り始めたのだろう  
彼らを取り巻く危険な運命の輪が

狂々くるくる  
と

狂々くるくる  
……

……

追憶ノ参々偽・落ちこぼれ達の休日（後書き）

という訳で、今回はティアナとネロに重点を置いた話になりました  
前半はティアナの思いとネロの気持ちを交えながら、新たな友を手  
に入れた感じに

ついでに人物紹介に載っていたオリキャラ・タマモの登場です  
彼女の立ち位置はネロの使い魔兼パートナー

他の子と比べ、積極的なので、早く『リリナのcrime』でレイ  
ンにアタックさせたいですね（笑）

ティアナの過去はもちろん原作どりの設定です

彼女はあまり変える必要が無いほど過去が暗いですから（苦笑）

後半はこれまた原作どりのとある休日の一日

ギンガ登場です。これから先、一切登場しませんので悪しからず（  
笑）

そういえば、ここでも原作設定を変えています。気付きましたか？  
さて、次回はいよいよ模擬戦編です。戦闘しかありません

教官が用意した強敵にスバル達はどう立ち向かうのか。お楽しみに  
それでは今宵の私の会話は一先ず、これまで

次話でお会いしましょう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3069t/>

---

『リリカルなのはSoldierS』 ~ The crisis of crime ~

2011年11月17日08時10分発行